

第3回 北海道・札幌2030 オリンピック・パラリンピック プロモーション委員会

会 議 録

日 時：令和4年（2022年）7月26日（火） 午前10時00分 開会
場 所：札幌グランドホテル 本館2階 金枝



北海道・札幌

冬季オリンピック・
パラリンピック
の招致を目指しています



1. 開会・岩田会長挨拶

事務局 皆さんおはようございます。開始時刻となりましたので、ただ今
(梅田スポーツ局長) より「第3回北海道札幌2030オリンピック・パラリンピックプロモーション委員会」を開会いたします。

私は、本日司会進行を務めさせていただきます札幌市スポーツ局長の梅田です。どうぞよろしく願いいたします。

尚、本日の会議はペーパーレスな会議とするために、資料の配布は最低限といたしまして、会場参加されている委員の皆さまにはお手元のiPadやご自身のパソコンで資料をご覧ください。iPadの説明は机上に配布しておりますのでご覧ください。ご協力いただきありがとうございます。

それでは、次第に沿って進めさせていただきます。

はじめに、岩田会長よりご挨拶をお願い申し上げます。

岩田会長 皆さま、おはようございます。岩田でございます。

皆様におかれましては、大変お忙しい中お集まりいただきまして誠にありがとうございます。

プロモーション委員会の役割であります大会の開催意義の議論につきまして、本日は「レガシー」をテーマに意見交換を行いたいと思います。

大会の開催によりまして、「社会」「まちづくり」「経済」「環境」など様々な分野において多様なレガシーがもたらされます。これらをわかりやすく的確に発信すること、これは招致への理解や共感を得る上で大変重要な要素でございます。

第1回会議では、2030年に引き継ぐべき東京2020大会のレガシーについて多くの意見をいただきました。こうした点も含めまして、知見の深い皆様方から基調発言をいただきまして、意見交換を行ってまいりたいと思いますのでよろしくお願いをいたします。

また、委員会のもう一つの役割でございます機運醸成の取り組みにつきましても、現状の報告をさせていただき、その上で機運醸成が市民、国民的な運動になるように皆様のご意見を賜りたいと思

ますので、その点も併せてお願いを申し上げまして、私からの冒頭の挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしくをお願いをいたします。

事務局 ありがとうございます。次に本日の出席者でございますが、お
(梅田スポーツ局長) 配りさせていただいた委員名簿のとおりでございます。なお、鈴木副会長の代理として、小玉北海道副知事にご出席をいただいております。

また、片山委員の代理として、片岡ニセコ町教育長がオンラインで参加をされております。また、山下会長代行、太田涉子委員、岡崎委員、竹中委員、渡邊委員はご欠席。文字委員は途中で退席されます。このほか、遠藤特別顧問が途中参加、室伏顧問は途中で退席の予定でございます。

それでは議事に入りたいと思いますが、議事進行につきましては岩田会長にお願いしたいと存じます。よろしくお願いたします。

2. 次第2：開催意義について（テーマ：レガシー）

岩田会長 それではどうぞよろしくお願いたします。早速議事に入らせていただきます。はじめに次第2の「開催意義について」でございます。今回のテーマはレガシーであります。

非常に幅広い内容を含むテーマでありますけども、2030年大会開催によるレガシーを招致段階から議論すること、開催意義を深めていく上で大変重要であります。過去の経験も振り返りながら、意見交換をしてまいりたいと思います。

はじめに、事務局より前回の振り返りも含めまして説明をお願いいたします。

事務局 それでは事務局よりご報告させていただきます。画面表示の他、
(梅田スポーツ局長) お手元に、あるいはメールにてパワーポイントの資料もお配りしておりますのでご確認をください。

はじめに、前回第2回会議の振り返りについてでございます。第2回会議の振り返りとして、前回「共生社会」をテーマに委員の皆さ

まからいただいたご意見を、内容に応じて分類・整理したものを
示しさせていただきます。

「北海道・札幌における共生社会のまちづくり・地域づくり」、「大
会開催を通じた共生社会実現への貢献」、「パラリンピック教育の推
進」、次のスライドに続きますけども、「パラリンピック・パラアス
リートの役割と東京 2020 大会のレガシー」、「ジェンダー平等の更なる
推進」の 5 項目でございます。

これらの内容を基にしながら、中間とりまとめ（案）に反映をし
てまいります。

次に、本日のテーマであります「レガシー」に関連して、札幌市
における国際大会のレガシーについてご説明をさせていただきます。

まず、1972 年札幌オリンピックのレガシーでございます。札幌は、
1972 年冬季オリンピックを契機に地下鉄や高速道路などの社会イ
ンフラが整備され、まさに、まちを「つくる」オリンピックでした。

アイスホッケーやスケート会場、スキージャンプ競技場など、当
時の施設は現在も多くの市民が利用しており、ウインタースポーツ
は札幌市民の生活の一部となっております。

また、さっぽろ雪まつりの様子が、大会の映像とともに世界中に
紹介されたことをきっかけに、国内外から多くの観光客が訪れるよ
うになり、国際観光都市としての地位を確立しました。

続いて、2017 年冬季アジア札幌大会についてです。大会のレガシ
ーとして「ボランティア」、「子どもたちの国際交流」の 2 点を掲げ
ておりますが、特にボランティアにつきましては、約 4,300 人のボ
ランティア「スマイル・サポーターズ」にご活躍をいただき、大会
後のレガシーとして、このスポーツボランティアコミュニティを継
承し、現在 1,200 名のスポーツボランティアが、2019 年のラグビー
ワールドカップや東京 2020 大会を始めとした各種スポーツ大会で
活躍をしております。

次に、2017 IPC ノルディックスキーワールドカップ札幌大会です。

札幌で初となる障がい者の国際スキー大会のレガシーとして、この大会でも、ボランティアとして多くのスマイル・サポーターズや学生ボランティアが参加をいたしました。

また、子どもたちの国際交流に加え、小学校におけるパラスポーツ授業や、スキー学習でのシットスキーの貸出などの取組を始めるなど、障がい者スポーツの普及・振興の大きな契機となっております。

次に、東京 2020 大会です。札幌でマラソン競技が開催されたことから、オリンピックマラソンコースの活用などマラソンツーリズムの取組につなげております。また、サッカー会場となりました札幌ドームでは、車いす観戦席の増設や、エレベーター改修などのアクセシビリティの向上・改善を図りました。

次に、共生社会ホストタウン事業です。札幌市では、ウクライナ男子とカナダ女子のゴールボールチームの事前合宿を受け入れ、地元の学生との交流事業を実施し、こうした交流が、若者が海外に目を向ける貴重な経験となりました。

最後に、昨年 11 月に策定いたしました 2030 年大会概要（案）におけるレガシーについて触れておきます。大会概要（案）では、レガシーを、「スポーツ・健康」「経済・まちづくり」「社会」「環境」の 4 つの分野に分けて例示をしております。プロモーション委員会での議論も踏まえながら、今後、大会概要（案）のレガシーのブラッシュアップも進めてまいります。事務局からの説明は以上でございます。

岩田会長

ありがとうございました。それでは次に基調発言をいただきたいと思います。レガシーを考える上で、まずは東京 2020 大会の経験を振り返ることは、大変重要であるというふうに思います。

そこで、東京 2020 大会でどのようなレガシーが築かれ、どう将来に継承するかについて、最初に元東京 2020 組織委員会ゲームズ・デリバリー・オフィサーの中村様。次に、慶應義塾大学蟹江研究室の佐々木様、早川様、蛇谷様に基調発言をいただきます。

尚、慶應義塾大学蟹江研究室の皆様は井本委員よりご紹介をいただきました。井本委員にはこの場を借りて御礼を申し上げます。

最初に、中村様の基調発言であります。現在所属をされている組織の立場を離れまして、東京 2020 組織委員会に所属されていたお立場からの経験を共有いただきます点を申し添えます。

また、この時間は公務により不在となる旨、連絡を受けていただきますので、録画によりご発言を放映させていただきます。それではお願いをいたします。

中村英正 様

(オンライン録画)

皆さんこんにちは。東京の組織委員会で GDO ゲームズ・デリバリー・オフィサーを務めておりました中村です。本日はこうした機会をいただきありがとうございます。東京大会、全国の皆様のご協力で何とか昨年開催することができました。

そこで得た多くの学び、良かったところもありますし、もうちょっと頑張れたところもあると思います。そういったところを整理して今日皆様にご披露して、2030 年の札幌招致に向けてお役に立てばというふうに考えております。まず、こちらは札幌だけではなくて、今後のオリンピック・パラリンピック大会に向けて、東京大会で学んだことを組織委員会、もう解散してしまいましたが、整理したものをベースにご説明させていただきます。

まず、資料の 1 枚目でありますけれども、これは当たり前のことでありますけれども、オリンピック・パラリンピックのコア、これは、いつの時代であってもスポーツであり、また世界から集まってくるアスリートであり、それを通じて連帯であるとか、あるいは特に今世界が求めている平和、そういったところがベースとなります。

これは 2020 年、昨年の大会も一緒でございましたけれども、こうした価値を、世界の情勢が、あるいは社会の環境が変わろうとも世界に届けるために、やはり変えていかなければいけないところがあると思っています。1964 年大会と 2020 年大会、かなり違いましたけれども、我々、大会の運営をかなり変えました。

主には「簡素化・軽量化」、「多様性」、そして3つ目は「参画」。
こうしたところが、1964年とは大きく違ったところだと思っています。
まずはその3点を中心にお話しをさせていただければと思います。

まず第1点は、「簡素化・軽量化」であります。これは札幌を招致するにあたって非常に多くの関心を集めているところだというふうに考えております。

どうしてもオリンピック・パラリンピック大会というのは、世界中から多くのアスリートが集まってきて、集中的に大会を行うために、この準備が必要になりますし、運営が必要になるということで予算はかかってしまいますけれども、まだ多くのところで簡素化、軽量化する余地はあると思っています。

まずは大会をやるにあたって、非常に大きな課題がいくつもありますけれども、大きな塊としてはやはり「施設」です。施設には多くの人があると申しあげましたけれども、「人」にかかるコスト。この2つをどうやって縮減していくか、というところがポイントになると思います。

施設の方は、もうすでに札幌の招致の計画策定に向けて十分ご配慮されているというふうに聞いておりますけれども、やはり、ありのままを活用するということが大事だと思っています。

ともすれば2013年の招致が決まった時も、ややその傾向があったと思いますけれども、やはりオリンピック・パラリンピックは大きな大会ですので、それを機会にいろんな施設を整備して、それをレガシーとして残そうというそういう時代のオリパラもありましたけれども、この7年間をとってみても、かなり時代は変わりました、やはり持続可能性というのが非常に大きなポイントになっております。

持続可能なオリンピック・パラリンピックということを考えると、やはりその開催する都市の状態のありのままをオリパラに活かすという発想がやはり非常に大事になってくると思います。

そういう意味では、まず既存施設を使っていただく。既存施設を使うにしても、様々な国際競技連盟（IF）からのリクエストで、「ここをもうちょっとオリパラスタンダードに直してくれ」という話が必ず来ると思います。

アスリートにフェアな環境で競っていただくには、一定程度そういうものに応える必要があると思っていますけれども、一方で、すべて要請を取り入れますと、やはりそこは、いくら既存の施設であっても、オーバーレイ的な変更を加えることで多額のお金がかかってしまいます。

そこはなるべく、競技運営ルール、施設のルールなどはありますけれども、オリパラといういろいろな競技が1ヶ所に集まってやるという大会の特性からして、そこは最大限融通を利かせてもらって、できるだけ現状の施設を変えない形で大会をやるのが非常に大きいと思っています。

それはコスト面だけではなくて、持続可能な大会という意味でも非常に大きいと思っています。それに向けて、やはり個別のIFと交渉していく前に、やはりIOC、IPC、開催都市、開催国等々で、そして競技連盟も交えて、できるだけサステナブルな大会をする。従ってオーバーレイも含めて、「施設の大きな変更は加えない方向で頑張っていくのだ」というコンセンサスを大会ごとにとっていくということが、ひとつのポイントになるのではないかと考えています。

そういうことで、皆がwin-winのシチュエーションを作っていくと各国際競技連盟（IF）も自分たちのわがままで費用がかかるとなると、これはその競技にとってはよいかもしれませんが、連盟全体のレピテーションに関わってくるということになると、必ずサステナビリティを重視していくというふうの方針を変えてくれるというふうに思っています。

これはすでに東京大会でアジェンダ 2020 というものができておりますので、これを大会ごとに、札幌版、その後の大会版というように、大会ごとにひとつひとつ作っていくこと、これが大事ではな

いかというふうに思っています。

もうひとつは、「人を減らす」ということだと思っています。大会の参加者が一定のままでもコストの縮減は可能ですけれども、どうしても薄皮をはぐような形になってしまいます。人数が減ると、そこにかかるコストは根っこから縮減することができますので、これは非常に削減効果があります。

東京大会は、ご案内のとおりコロナという観点から、大会関係者を1/3以下にすることができました。これはコロナ禍だからこそできたところがあるのですけれども、これを東京大会はコロナだから特別、特殊なのだということで片づけるのではなく、今後のコンパクトな大会のモデルタイプというふうにできればというふうに思っております。

大会の参加者の縮減、人数の縮減、これを直前にやってしまいますと、それはそれでコスト縮減の余地は少なくなってしまうので、できるだけ早い段階でIOC、IPC、その他と合意をして縮減をするということが大事だと思っています。

これは東京大会でもできましたが、リモートでもいろいろ参画のやり方、大会の楽しみ方、選択肢が広がりましたので可能だと思います。また、観客まで踏まえると、リモートでも楽しめるという幅が広がりますと、これは夏の方がメインかもしれませぬけれども、夏休みの開催時期にやらなければいけないかという大きな制約条件は、観客の移動が必ずしもその都市に行かないと楽しめないということではないとすると、開催時期にとっても選択肢が広がるのではないかと思っています。

それでは、3点目の「準備期間の短縮化」であります。これは将来大会に向けて1つの提言とさせていただきますが、開催都市の決定というのは、札幌の場合は近々というふうに聞いておりますので、開催が決まった後も本当に集約的な準備は短くした方が、コストがその分節約できますので、あまり最初から全力疾走ということではなくて、最初のうちはコンセプト作りや参画に注力された方がいい

のではないかというふうに考えています。

以上、申し上げたように、施設の面、参加者の人数の面、そして準備期間を短くする、こうしたことを踏まえれば、コストはかなり縮減できる余地があるのではないかと、というふうに考えます。

2つ目は「多様性」でございます。1964年大会と昨年の東京2020大会を比べますと、やはり社会の価値観が多様化したということ強く感じております。

1964年もいろんな価値観はあったと思いますが、今日に比べるとシンプルであったとっております。多様化するとすると、やはりこれだけ大きな大会では、大会についての賛否を含め多様な意見が出てくること、これは当然だというふうに考えております。それを前提に準備、そして開催をしていくということになると思います。

その際に、当然、賛成何%、反対何%という最後のトータル数字のところが出てきて、それはそれで非常に大事なメルクマーク(指標)になると思うのですが、大会運営をしてきまして、その賛成反対の数字だけではなくて、最初に申し上げたように、価値観が多様化する中、その賛成が80%とか90%を目指すというよりも、反対の方は、何故この大会に対して心配をされているのか、そして賛成の方は、どうしてこの大会が価値あるものと思っているのか、というところをお互いコミュニケーションを取って対応していくことが大事だというふうに思っております。

東京大会の場合には、賛否が拮抗して、それがずっと対立が続いていくというイメージは確かにありましたけれども、終わってみると、やはりコロナ禍で大会をやるのが安全安心で大丈夫かという、心配される方がいたからこそ、我々は選手村では毎日検査、そして海外から来る方には85%以上の方にワクチンを接種していただいて、その結果、安全な大会ができたと思っておりますし、ジェンダーについても様々なことがあった結果、ジェンダー・イコーリテイ、選手の数だけではなくて、様々な取り組みができたというところが

あります。

つまり、厳しい意見があるからこそ、仕上がりとしての大会はよくなった面があるのだと思います。

そういう意味では、札幌におかれても様々多様な意見があると思いますけれども、おしりの数字だけに着目するのではなくて、その下にある価値観をどう共有化して、共有化するだけではなくて共通点を見つけていくのかというところが、今日のオリパラ大会の大事なポイントではないかと思っています。

もうひとつ多様性という意味では、子供たちにとって学びになったということではないかというふうに思っております。残念ながら、大会の観客席での子供たちの観戦はほんの一部しかできませんでしたがけれども、大会をテレビなどを通じて見ていただきましたし、スポーツの大会を楽しむだけではなくて、マスコットを決めていただくのに、全国の8割の小学校に参画していただきました。

そこで小学生が、パラリンピックについて、オリンピックについて、いろいろ考えて、その結果、いろんな学びがあったというふうに思っています。そういった感受性の強い子供たちが2016年にマスコットを選んでいただいたわけですがけれども、当時12歳だった子供は来年、成人の18歳になっていきます。

そういった感受性の強い子供たちが、オリパラの準備期間にコミットしていただいて、そして見ていただくことで多様な価値観を持った子供たちがこの日本、そして東京に数多く育って、それが社会の中核になっていくということを考えますと、オリパラを通じてこの多様な社会が構築されていくということが言えると思っています。

そこが東京大会のもっとも大きなレガシーではなかったかと思えますし、これをワンショットで終わらせるのではなくて、2030年も引き続きできるということを強く望んでおります。

3点目の多様性という意味では、オリンピックとパラリンピックの融合ということが、2030年に向けたひとつのポイントになるので

はないかというふうに考えています。

東京大会は、ジェンダー・イコリティということで、男女の選手人数は、ほぼ 50%50%に向けて達成をいたしました。また、混合種目、男女の混合団体戦なども数多く作りました。

ジェンダーのイコリティーはかなり東京大会で達成できたと思いますので、次なるステップとしては、オリンピックとパラリンピック、大会は 2 つございますけれども、いかにそれを一体化していく、融合化していくというところがポイントの一つになるのではないかと、多様性の観点から思っております。

3 点目は、「参画」であります。これは今までお話ししたことの繋がりが大きいポイントでございます、最初に申し上げた簡素化、軽量化、まさに SDGs の発想だと思っておりますけれども、SDGs 自体、「地球の環境」とか「持続可能性」という非常に大きなテーマを理念的なものではなくて、自分たちができる足元の取り組みに結びつけていくということで、大きな社会運動にしていくということだというふうに私は思っております。大会の簡素化・軽量化、持続可能な SDGs としてどういう大会にしていくのか、札幌にとっても大きな取り組みになると思います。

こうしたことを組織委員会や市や国だけではなくて、多くの方に参画していただいて、いろいろなアイデアを出していただいて実現するということが非常に大事だと思っております。東京大会でもメダルプロジェクトなどをやりましたけれども、こういった取り組みをぜひ札幌大会でもやっていただければと思います。

また、価値観が非常に多様化しておりますので、賛成、反対でそのままにしておくのではなく、いろんな多様な意見を持った方に集まっていただいて、どうやってこの対立しそうなところを乗り越えていけるのか、といったところの意見集約、そのプロセスの過程を作っていくことが非常に大事だと思っております。

また、多様性の第 2 点で申し上げましたように、子どもたちにどう参画していただくのか、大学生もそうですし、中学生・小学生・

高校生そういった子供たちにいかに大会に参画してもらうのか、単にスポーツ大会を見て楽しむだけではなくて、自分ごととして感じ取ってもらうのか、非常に大きな話しだというふうに思っております。

東京大会でもマスコットの選定などを子どもたちに、先ほども申し上げたように、非常に多くかかわっていただきましたので、この取組を札幌でもぜひ進めていただきたいと思いますし、ぜひ札幌では取り組み、イベント、として参加していただくだけではなくて、コンセプトづくりとか企画段階から大学生や高校生などにも関わっていただくと良いのではないかと考えています。

最初に申し上げましたけれども、オリンピック・パラリンピックはスポーツの祭典でありますけれども、時代の要請に合わせて、「簡素化・軽量化」「多様性」そして「参画」が求められるということでもありますけれども、今申し上げてきたように、義務だからとか、やらなければいけないところだから義務感でやるということではなくて、こうした変化を前向きに札幌大会で取り組むことで、北海道の、そして日本の、そして世界の持続的な発展の礎になっていくというふうにポジティブに捉えていくことが非常に大事だと思っております。

時代や社会が変わるからオリンピックが変わらなきゃいけないというのも一面正しいですが、むしろオリンピック・パラリンピックが変わることで、社会に新たな姿を見せるというところが、もうひとつ大きな側面ではないかと思っております。

そういう意味では、東京大会のビジョンでは、スポーツには世界と未来を変える力がある、というふうに申し上げました。繰り返しになりますけれども、東京大会でパラリンピックであるとか多様性であるとか、ポジティブな面もありましたし、また東京大会を通じて社会の縮図として様々な問題点が出てきたところもあります。

こういったところも含めまして、スポーツにはやはり社会を変えていく大きな力があるというところを念頭に置いて、開催、招致、

そして大会準備に向けた取り組みを進めていくことが大事ではないかというふうに考えています。

後ろの方に、「参考資料」をつけております。

「参考の1」は、パリの組織委員会に我々が引き継いだ内容でございますけれども、これは今説明したことが書いてありますので後でお読みいただければと思います。

「参考の2」が、全国10ヶ所ほど大会が終わった後にパラリンピックの施設を見学させていただきました。その資料の抜粋であります。1998年の大会があった長野は、まず、冬のパラリンピックを通じてその施設・センターができたということで、その後の多様性の一助になってということでございますし、東京はまさに大会が終わり、オリンピック・パラリンピック大会を踏まえることで、多様性の社会に向けた大きなステップとなったということでございます。

また、2026年の名古屋も、このアジアのパラリンピック大会を通じて多様な社会を変えていこうという取り組みを進めているところであります。

札幌も前回のプロモーション委員会で多様性が大きなテーマになったと聞いておりますけれども、そうした取り組みがあると、私も実際に現地にお邪魔してお話を伺いまして、大変期待をしているところでございます。

また、最後のところで、広島大学でのパラスポーツのサポートといった取組を学生が主体的に取り組んでいるというところもオンラインで聞かせていただきました。

その関係で、「参考の3」は、大学連携について、これは東京大会のレガシーということで、このネットワークを残そうというふうに考えております。

やはり繰り返しになりますけれども、若い世代、大学生に大会にコミットしていただけるのは非常に大事なことだと思っておりますし、今日、大学の蟹江先生のゼミの方、蟹江先生にはSDGsの観点から、私自身も非常に大きなアドバイスいただきましたけれども、す

でプロモーション委員会でも大学生に参加していただくということで、これは非常に大きな良いスタートになっているのではないかとこのように思っています。

岩田会長

ありがとうございました。

それでは、次に、慶應義塾大学蟹江研究室の皆様をお願いいたします。それではよろしくお願いいたします。

慶應義塾大学

皆さん、おはようございます。

蟹江研究室

このたびは北海道・札幌 2030 年オリンピック・パラリンピックプロモーション委員会にお招きをいただきまして、大変にありがとうございます。

佐々木 剛二 様

本日は、「私たちがほしい世界とスポーツ・学生による東京 2020 年大会持続可能性評価」というタイトルで、発表をさせていただきたいと思っております。

本日の発表者はこちらの 3 名になっております。私、慶應義塾大学 SFC 研究所の上席所員をしております佐々木と申します。それから環境情報学部 4 年生の早川さくらさん、今日はオンラインで参加をさせていただきます。それから同じく環境情報学部の 4 年生の蛇谷幸紀君、今日は 3 名の発表者にて登壇をさせていただきます。

今日お招きいただきました、慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス蟹江研究室の SDGs 研究について、自己紹介ということでさせていただきます。

蟹江研究室では、SDGs の実現のために、多様な研究・教育・産学連携プログラムに従事をしております。先ほども言及をしていただきましたが、SDGs 研究の第一人者の一人である蟹江先生をはじめとしまして、私のような若手の SDGs の研究者と、慶應大学で学ぶ言わば Z 世代の学生が、企業や自治体の方々と協業させていただいている、そういうことを行わせていただいております。

慶應義塾大学の湘南藤沢キャンパスでは、学生のことを「未来からの留学生」というふうに位置づけております。これは、未来から持続可能な世界を創るために大学に学びに来てくれているという

学生の一人一人であるということを考えているところです。

これから実現したい、本当に目指すべき将来の社会からバックキャストして問題解決の道筋というのを示していこう、そういう活動を行わせていただいております。

本日は、学生主体の持続可能性評価のプロジェクトについてお話をさせていただきますが、実はこれには原型というものがあまして、2015年から17年に Olympic Games Impact 調査というものを行わせていただきました。

これは、2020年オリンピック・パラリンピック競技大会の開催が生じる有形無形の影響について理解を深めまして、その結果の経過と進化を客観的な方法論に基づいて追跡をしようと、そういうものでございました。

こちらは、2015年から慶應大学がリサーチ・パートナーとして組織委員会から受託をして行っていた研究でございます。

国際オリンピック委員会が定めるガイドラインに基づきまして、独立・中立の第三者による評価ということで、「環境」、「社会文化」、「経済」において大体31の課題と90の項目を設定して報告書を作成、さらにこれを大会後まで計12年間、定期的に報告をするという予定でございまして、これは持続可能性に配慮した運営計画にも記載をされていた内容でございます。

ただ残念ながら、2017年にこのベースライン報告書というのを発表しようというところで、残念ながら急遽中止になってしまったという経緯がございました。

しかしながら、私どもの研究室の方では、この研究を学生による持続可能性評価として続けておりまして、特に2020年からは朝日新聞社さんとの協業という形で行わせていただいております。

東京大会での調査をもとに、学生主体の調査分析を行っていこうという形で研究を行っております。

蟹江研究室のみだけではなくて、スポーツ医学に関連をされている小熊祐子先生であるとか、障がい者スポーツの研究をされている

塩田琴美先生、そういった他の複数の研究室と共同で研究を行い、また、大会のパートナー企業のサステナビリティの関係者の方々であるとか、ゲストスピーカーの方々と対話を行いながら調査したということでございます。

それで、ひとつのポイントでありますけれども、2013年の大会の招致の決定から8年後の2021年の大会が行われるまでに、一番大きな話題、議題になったのはこのパラダイムシフトというのが起きているのではないか、ということでございます。

2013年の大会招致決定の時には、オリンピックというものがあって、サステナビリティはその一部というふうに捉えられていた。それが大会開催の2021年には、オリンピックよりもさらに、このサステナビリティというのは本当に、あの世界全体で取り組んでいかなきゃいけない、そういうふうに関係性が変化したのではないかということを考えております。

いわば経済成長、それからインフラを作っていこう、それをスポーツの熱狂、興奮で盛り上げていこうという大会の在り方ではなくて、SDGsをどういうふうにして社会として実現していったらいいのか、環境や社会がよりよくなっていくためにはどうしたらいいのか、更には、市民の方々の心身共のウェルビーイングというのを、どのようにこのスポーツを通じて盛り上げていけばいいのか、そういったことにフォーカスが移ってきたのではないか、ということでございます。

タイムラインを見ますと、2013年にはまだSDGsという言葉もなかった訳ですけれども、その後パリ協定が発効しまして、またSDGsも採択をされ、さらに世界的には気候変動に対する行動というのが全世界的に進んできた。

さらに、#MeTooムーブメントのようなジェンダーに関して、今まで声を上げられなかった人たちが声を上げていく、そういった社会の大きな変化というのがございました。

その中で、さらに残念ながらコロナというのが全世界を覆ってし

まった。その中で本当にこの大会が開催されて、その後の大会開催以後の世界をどういうふうにしていったらいいのか、ということを考えていかなければいけない、ということが我々の研究のポイントになりました。

もうひとつですが、これはちょっとスポーツのメタファーを使わせていただいておりますけれども、いわば大会のバウンダリの枠組みの中で、ネガティブな影響を減らそうというディフェンシブなサステナビリティだけではなくて、大会のバウンダリを超えて、社会全体に対して、どうすればポジティブな影響を創出できるか、攻めのサステナビリティというのが重要ではないか、ということと一緒に、今、学生のメンバーと考えているところでございます。

ではここから、持続可能性評価の内容に関しまして、学生のメンバーから説明をしてもらいたいと思います。

蛇谷 幸紀 様

蛇谷幸紀と申します。ここから大会持続可能性評価の内容を説明します。

評価のプロセスとして図のような流れで分析をいたしました。最初に、SDGsに基づき、大会が目指す社会像を定義しました。次に OGI 調査を原型として、学生と研究者の議論を通じて取り上げるべき調査指標を選定いたしました。

そして、既存の統計や報告書に示された数値データから、大会による評価を分析する「指標分析」を行いました。次に人々の語りや観察に基づいて、人々の経験に光を当てる「質的調査」を行いました。そして、集めたデータからカテゴリーごとの分析を行い、さらに環境・社会・経済の分野について総合的分析を実施いたしました。

先ほど説明した OGI 研究で明らかにしたとおり、大会の環境・社会・経済の様々な側面が SDGs のターゲットと深い関わりを持っています。

そうした考えに基づき、私たちのプロジェクトでは、SDGs のゴールを用いて、大会の各側面について 20 の分析カテゴリーを設定しました。さらに、各カテゴリーについて複数の指標を設定することで

評価を行いました。

このプロジェクトでは、詳細な調査シートを用いて学生主体の分析を行いました。指標分析では、SDGs のゴールやターゲット、公開された情報を基に分析を行いました。質的調査では、大会のステークホルダなどに実際にインタビューを行い、フィールド観察や統計などを通じて数字には表れづらい人々の経験や課題を明らかにすることを試みました。この調査には、「誰一人取り残さない」という思いも込められています。

こちらは 2012 年ロンドン大会における大会影響調査の大会後報告書です。ロンドンではロンドン東大学が担当し大会後、報告書は 2015 年に発行されました。100 以上の指標を分析しながら、影響を記述し、評点を付けました。

私たちのプロジェクトでは、さらに詳細なデータをもとに分析を行いました。特に、目指すべき社会像を定義したことも特徴的だと思います。大会以前の社会の状況をもとに、大会後に目指すべき社会の状況はどうか、その実現のためにどのような大会であるべきなのかを、皆で議論しながら設定いたしました。

これを基に、エビデンスに基づく分析評価を行いました。

例として、私が調査を行った水質カテゴリーについて少しお話しをしたいと思います。まず、指標分析の方では、オープン・ウォーター、トライアスロン会場であるお台場海浜公園の水質を調査しました。

お台場海浜公園では、雨が降ると大腸菌が増加し、水質汚染が大会前では課題になっていました。そこで限定的な 3 重スクリーンの設置や、砂の投下などの対策がとられました。結果、大会当日は無事基準値をクリアすることができました。しかし、海浜公園の 3 重スクリーンの設置は一時的な措置であり、大会後スクリーンは撤去されたため、持続的な水質改善につながっていない可能性があると考えます。

一方で、質的調査の方では、サーフィン会場の一宮町役場にイン

タビュー、現地フィールド観察を行いました。

会場担当者によると、大会が及ぼした水質上の直接的影響はほぼなかったという結果が出ました。しかし、大会を契機に、地域住民やサーファーの皆さんが小学校での啓蒙活動やビーチ・クリーンに参加するなど、環境への関心が高まる要素になったと考えます。

右の写真は、大会後、私がサーフィンビーチを観察しに行った時のものですが、ビーチにゴミが全く落ちてなく、きれいな浜であったことが今でも強く印象に残っています。

これらのことに基づくと、市民やサーファーの自主的な参加によって、結果的には海岸の環境に良い影響が生まれたと言えるのではないのでしょうか。

今回の調査の結論として、東京大会の環境施策は一時的・限定的な対策にとどまっていて、レガシーにつながっていないのではと思うところがあります。

私はオリンピック大会を通して環境配慮の見せかけや、大会開催時のためだけの解決ではなく、持続的な環境改善の仕組みを作ってほしいと思っています。

課題の根本的解決を図り、後世に残していくことが、持続可能性が求められている現代には必要です。

これは学生が行った調査のうち、主なカテゴリーの分析評価をまとめたものです。例えば、エネルギーについては大会期間中の再生可能エネルギー使用率が100%になり、カーボンニュートラルな開催が実現できました。しかし、実際には再エネ電力や排出量の買い取りが大きな割合を占めていました。

また、メダル、聖火トーチ、選手村の段ボールベッドなどシンボリックな試みが行われた一方、食品の大量廃棄があり、フードロスの削減などについては課題も残りました。

ここからは、オンラインで参加している早川さんに報告をしてもらいます。

早川 さくら 様

早川さくらです。どうぞよろしく申し上げます。

次に、社会分野での分析についてご説明します。まず、スポーツカテゴリーでは、スポーツ医学公衆衛生の専門の研究チームから、コロナウイルスの感染対策の影響でスポーツ実施率が低下したこと、また大会の影響は今後のさらなる分析が必要であることが指摘されました。

マイノリティについては、自ら LGBTQ であることを公表する選手の数が増加し、メディアを通じて認知が広がりました。しかし、当事者の方々は、日本における性的な多様性に関する認識の後進性を指摘していました。特にジェンダーについては、森前会長による発言が社会的に大きなインパクトをもって受け止められました。

その一方で、大会では参加選手の男女比率が是正されるとともに多数の男女混合種目が導入されました。JOC の理事の女性比率や、公正でインクルーシブな報道のためのガイドラインが定められました。

そして、教育については多くの学校で障がい者理解のための教育プログラムが実施されたことが評価されました。単発で終わらない継続的なサポートが必要であるとの指摘がありました。

経済分野のうち、観光についてはコロナウイルスの影響、大会の延期、および無観客開催により、国内外からの宿泊客がほぼ停止し、大会の招致や準備期間において、期待された観光者や観光消費の大幅な増大は実現しませんでした。

一方、交通に関しては、大会車両に用いられた水素燃料車、周辺地域を結ぶ水素燃料バスの導入などに進展がありました。

また、大会会場に隣接する鉄道駅のバリアフリー化などが進められました。大会招致以降、東京の有明、豊洲、虎ノ門エリアなど大規模な都市開発が進展し、競技場や選手村の開発などが進みました。

しかし、多くの新設競技施設はその運営において、大幅な赤字が見込まれることが指摘されています。

私たちのプロジェクトでは、朝日新聞社の大会担当記者の方々のディスカッションを積み重ねてきました。

昨年は学生メンバーと橋本会長との対話の機会を設けさせていただきました。また、調査結果の一部を記事としても発信していただきました。

東京大会は、新型コロナウイルスの影響にさらされ、無観客での開催となりましたが、長期間にわたる大会の準備によって、「環境」「社会」「経済」のそれぞれにおいて、いくつかの前進が見られました。しかし、サステナビリティの推進にかかわる大きな社会的運動にはつながらなかった、というのが学生の評価でした。

特に、ジェンダーや人権をめぐっては日本の課題が浮き彫りになりました。大会は終了しましたが、持続可能な世界の実現という目標は変わりません。私たちはこれまでに築かれた勢いや資源をいかSDGsの達成の道筋につなげるか、が大切であると考えています。

組織委員会が解散する中で、大会後に目指すべき社会のビジョンを改めて定義しながら、エビデンスに基づいて評価をすることが重要だと思います。

それでは最後に、このプレゼンのタイトルでもある「私たちがほしい世界とスポーツ」について、3つのポイントに分けてお話しします。

私は高校3年間でスイスのインターナショナルスクールで過ごしました。留学中、こちらの写真にある国連のHabitat for Humanityという活動に参加しました。ベトナムで貧困などの理由で家がない方々とともに家を建設する活動です。

現地の家族とは言葉が通じず、はじめうちは意思疎通が困難でした。しかし、家を持つことができないという不安や苦しみを想像しながら共に作業をすることで、次第に自分自身の中にあつた壁を乗り越え、現地の家族と強い信頼関係を築くことができました。

私たちの世界では、SNSで自分と似た意見を持つ人の声にばかり耳を傾け、異なる立場の人への想像力を持つことができない傾向が強まっていると感じます。この分断を乗り越えるためには、自分自身の中にある偏見にこそ向き合わないといけないのではないでしょ

うか。

私たちがほしいのは、自分を差別していないと思う人の心の中にも先入観や偏見があることを認め、一度立ち止まって考えることのできる世界です。立ち止まり、その場所から誰かが排除されていないか確認する姿勢、他者を理解しようと歩み寄る姿勢こそが、SDGsを実現する基礎としての、見せかけではない本質的なパートナーシップにつながると考えます。

私たちは、目に見えない差別など、社会にある課題を人々が「自分ごと」として捉えられる大会を目指してほしいです。光が当たらない人々への想像力を大切にすることで、初めて様々な市民を巻き込んだ大会が実現できるのではないのでしょうか。

以前、私たちは企業のSDGs広告に関わるプロジェクトで、ジェンダー、貧困、健康、環境の観点から女性の生理を扱う活動を推進していました。しかし、このテーマが最後のフェーズになって中止となってしまいました。

私がこの経験から学んだことは、現在の社会の様々な場所で、都合の悪いことは無視するという姿勢がまだまだ残っているということです。

女性が男性よりも不利になることが繰り返される社会の構造が残っているのは、意識改革は到底進んでいるとはいえないのではないのでしょうか。私たちはジェンダーによる偏見や差別がない世界を実現したいです。そして、あえてジェンダーを取り上げなくてもよくなる未来が来てほしいと願っています。

スポーツをめぐっては、LGBTQを含むジェンダーに関する無意識の思い込みについて、互いに心理的安全性をもって語り合うことで、社会が前進するきっかけをつくってほしいと思っています。また、誰もがジェンダーを理由に判断されたり、嫌な思いをすることのない大会としてほしいです。

SDGsについて、今の流行り、知ってはいるけど、特に共感しないという姿勢の人が多いいことを最近肌で感じます。企業や行政レベル

では「SDGs ウォッシュ」や「持続しないやり方」、個人のレベルでは「自分の力では達成できない」という諦めがあり、システムをデザインできていないのが現状ではないでしょうか。

私たちが欲しいのは、一人ひとりが自分だけの使命と言っては大きいかもかもしれませんが、役割やテーマのようなものを見つけ、それに対してアプローチできる世界です。SDGs は 17 のよりよい未来への道標です。私たちは市民が自らの使命を見つけ、挑戦する力を大切にしたいです。

アスリートのスポーツへの挑戦は、そうした一人一人の挑戦をエンパワーできるはずです。スポーツを通じてサステナビリティとの出会いが生まれ、多くの人にとっての原点となればよいと思います。

これからもサステナビリティに関する研究活動を楽しみながら、それぞれが自分だけの使命を探していきたいと思います。

以上で発表を終わります。本日はありがとうございました。

岩田会長

蟹江研究室の皆様、ありがとうございました。それでは意見交換に入りたいと思います。基調発言者へのご質問がありましたら、併せてお願いをいたします。

なお、中村様は後ほどオンラインで参加される予定でございますので、参加された段階で改めてご紹介をさせていただきます。

まず会場にいる委員、次にオンライン参加の委員の順で意見をいただきます。会場にいる皆様、ご意見がございましたらお願いをいたしたいと思います。

牧野委員お願いいたします。

牧野委員

牧野でございます。私がプロモーション委員をお引き受けしたのは、2030年札幌冬季オリパラが開催されるということに対して大きな期待があったからです。私は本当に一般人なのです。オリパラはテレビでしか見たことがありません。しかも、ここでテレビで応援していた選手の皆さんとお会いできるなんて不思議な感じがしています。テレビの前で感動して涙を流したり、そんなことをしていました。

他の委員の皆さんは、たぶん実際の運営の話しであるとか、内部のことをご存じでいらっしゃるのかもしれませんが。私は前回の委員会で渡邊委員が発言していらっしゃるけれども、ソルトレークシティの動きなど、そんなこともお恥ずかしいのですけれども、そこで知った次第です。

私は、普段マスコミ報道であるとかネットで見たり、それから札幌市の広報とか、知り合いからの情報しか得られないのです。

この委員のメンバーになった日から、少しでも遅れをとらないように情報収集しようと思ひまして、新聞を読んでは、オリンピック関連の記事を切り抜きしてとっておいたり、札幌市のそれに関連した除雪対応の記事なども切り抜いて、アンテナを張りながら毎日過ごしています。

しかし、どうしても、私のような一般市民に入ってくる情報というのは限られてしまいます。目につく情報というのは、マイナスなことが多くて悲しくなります。例えば、先日も新聞報道で東京オリンピックでの資金提供の疑惑の記事もありましたけれども、「受領か？」っていうふうな疑問符で出ていたので、本当のところは私にはよくわかりません。でも、あまりよい気持ちがしません。オリパラのイメージ悪くなると思います。

東京オリンピックでは、デザインのやり直しなどもあったり、経費の部分ばかりが追及されていました。札幌オリパラが開催された際には、ぜひこのような報道がなされない、クリアなものを切に臨んでいます。

私は、プロモーション委員の名刺を作っていたので、お名刺交換を、それ以来する時にお渡ししているのですが、そうすると、必ずこの招致の話題になります。企業経営者の中には、「反対意見を今までずっと言っていたけれども、牧野さんが誘致応援しているなら反対しないことにする」と言ってくださった方もいらっしゃいました。

反対する人の意見というのは、実は運営することはすごく大変だ

とか、オリパラよりも自分たちの生活を何とかしてほしい、それから除雪のことももっとしっかりしてほしい、それどころじゃないという話もあります。

まちの環境が変わることで、私たちの生活にもプラスになるというのを、もっともっと知ってほしいと思います。除雪もオリパラ開催によってもっと改善されるでしょうし、建物もとにかくバリアフリーにするというのと、どんな目的で、どんな人が使うのか、それがはっきりしていると、作り方が大きく変わってきます。

ただ、まちをバリアフリーにとか、ユニバーサルデザインにしましょうというのではなくて、世界に誇れる環境のまちづくり、これを考えて行うのでは大きく違います。

札幌市広報なども予算の使い方とか、運営についてとてもよく分かりやすく書いてくださっています。でもこれがまだまだ浸透していないように私は感じています。

私は札幌オリパラに期待している、と冒頭で申し上げましたけれども、まちが誰でも住みやすい環境に変わることで、それと2つ目は障がいのある人など、多様な人に対する理解が深まって心のバリアフリーが進むこと、これを期待しています。

事務局説明の資料にもありましたけれども、「スポーツ・健康」「経済・まちづくり」「社会」「環境」この4つのテーマがありました。

オリパラ開催による良いところをもっと具体的に発信したらいいと思います。漠然としたものでは、心が動かないです。

札幌市における国際大会のレガシー4つのテーマ、先程出ていましたけれども、今後、ブラッシュアップしてこれから発信していくということですが、これも早くしていただきたい、そんなふうに感じています。

例えば、ICT等を活用した新たな交通体制の実現という項目もありましたけれども、これは一体どんなことを言っているのか、再生可能なエネルギーの利活用、これもどういうことなのか、それとジュニアアスリートの発掘育成、それはどのようなことが行われるの

か、こんなことも知りたいです。

私も障がいのある子どもさんのいるお母さんとお話をしていると、「うちはお金ないから、そのようなパラスポーツの道具を買うこともできない、うちは無理だわ」とおっしゃる方もいます。「練習する場所もまだまだない」そんなことも聞いています。

私の一般市民としての視点で感じていることをお話ししましたけれども、これからは環境と意識の向上、人の意識の向上、これが大きなレガシーにつながっていくと感じています。ずれたことを言っていたら申し訳ないのですが、日頃感じていることをお話しさせていただきました。以上です。

岩田会長

はい、ありがとうございます。そのほか、会場の委員、ご発言ございませんでしょうか。はい、太田委員お願いいたします。

太田委員

素敵なプレゼンテーションありがとうございました。

東京 2020 大会を招致した時に、若い世代にどれだけ次のチャンスをお渡しできるかということ、常々、海外でも日本でもずっと言っていたのですが、その希望の光を見たというふうに思いました。発表者のお三方、本当にありがとうございました。

その上で SDGs ウォッシュ等は、スポーツが抱えている課題というより、日本国全体が抱えている課題だと思っていて、ジェンダーの問題もですけど、こういう理事職みたいなものというのは、比較的女性を入れやすかったりします。

一方で、本当に働くバックオフィス事務方の男女比率というのは、達成できていないということが多くあるかと思います。実際にオリンピックの種目も男女比率を 50%・50%にすることは、それほど難しくはなくて、ただ組織委員会で働いている職員の皆さんのジェンダーをイーブンにしていくことは、もっともっと難しいです。これは本当にトップの強いコミットメントが必要かというふうに思っております。

あと、こういった会議体もそうですが、今回のような場所が、渡邊委員からもかなり強く言われていましたけれども、何のためにや

っているのかというところ、1カ月間の世界の動きがものすごく速い中で、我々がこの会議室の中でどんなにこういった勉強会をしても世界の票は取れない、IOC委員の心は打てないというところは、今一度我々が認識して、その上で何のためにこの会議をしているのか、というところをやっていって欲しい。

僕もそこの部分に関してはIOC委員としても協力していきたいと思っておりますので、今一度、そこの方向性を勉強会ではなく、我々はプロモーションしていくために何をすべきなのか、というところの意思決定を最後に出せば良いと思っています。ありがとうございます。

岩田会長

ありがとうございます。河合委員お願いします。

河合委員

はい、ありがとうございました。発表いただいた中村さんを含めて、慶應大学の皆様も本当にありがとうございました。

今回、開催意義のレガシーということであったかと思いますがけれども、前回の会でも発言させていただいたように、今目指しているSDGsもそうでしょうし、共生社会であるとかというものを当たり前な状態にするというゴールに、まずBeingな状態を目指そうということをしっかりと入れていければと思います。

また今日の発表にも、学生さんたちからもあったように、若者や子どもさんたちの「考えて、気づいて、身になったこと」そのものがレガシーとしてこれからの日本、北海道、札幌市をより良くするすごい大きな力になると、再確認できた時間だったと思います。

そう考えたときに、この開催者であるのはもちろん、札幌市や北海道もそうでしょうし、JOCや我々JPCもそういう側に一部なっていくわけですがけれども、やはり市民であり、道民である皆さんそのものも開催者であるという主体性を持っていただくような働きかけ、そして、その中には当然子供たちや若者たちがこれを開催する意義の議論にも加わっていくことがとても大切であり、そのことが、自分たちはこういう大会にしたい、そして次のステージにとよく言っているが、次のステージとは何なのか、など自分たちの言葉で発信

する、そして、それを我々も一緒になって形にしたもので、国内外にしっかりとプロモーションしていく。

当然、同時並行でやっていくしか時間はないと思いますが、このプロセスを抜きにして取り組んでいては、なかなか理解を得ていくことは難しいのだろうな、というふうに思います。

改めて、子供たちとのこういったポジティブな対話を、あるいはもちろんネガティブな意見とかも含めて受け止めながら、しっかりと2030年に北海道・札幌でオリンピック・パラリンピックが行われることを通じて、間違いなく皆さんにとっても、そして社会にとってもより良くなっていくということを実感できる、そういった夢や希望を皆さんと共有できるようなコンセプトづくりをこれから取り組まなければならないと、今日の基調発言の2グループの発表をお聞きして感じたところになります。

引き続きよろしく願いいたします。

岩田会長

ありがとうございます。荒井委員どうぞ。

荒井委員

荒井でございます。今日の本場にプレゼンテーションありがとうございました。

大きく2点ですね。中村さんから慶應大学の皆さんからお話しがありましたが、若者がもっと参画する、本当に大切なことだと思っています。ぜひこの時の定義の若者というのを中村さんも大学生を中心という話がありましたけれども、北海道、日本全国の大学生というのは、その世代の半分ぐらいが大学に進んでいまして、高卒でも社会で頑張っている方もいらっしゃいます。

僕自身、高校の校長をやっていましたので、高校生でも十分にこういうレベルの議論に参加できますし、高校の教育もまさに探究型の教育というのをしています。実は僕は大学生のときに、YOSAKOIソーラン祭りの第5回目の実行委員長もしましたので、大学生も素晴らしく活躍できるのですが、でも高校生も学校の授業の一環として十分できると思っております。

今日は、北海道庁からは小玉副知事いらっしゃっていますけど、

小玉さんはもともと北海道の教育長でもありましたし、まさに札幌市や北海道の私立、公立合わせて高校生は大変優秀ですし、やる気があります。

そして、札幌市は中学校3年生が毎年たしか1万3千人ぐらいいるはずで、毎年1万3千人の子たちが中学から高校に上がってくるわけです。つまり、1年間ずつ1万3千人が積み上がっていきます。中学生・高校生がこういったオリパラのプロモーションに関わっていけば、8年経ったら10万人以上の若者たちがオリパラの招致に関わってきた（卒業はしていますが）経験を持っている、そういった10万人の人たちが開催した時にもう1回集まってきて、その母校や関わった人たちと一緒に盛り上げていく、ということも大事なプロセスではないかと思えます。

先程、最初にお話しいただきました牧野さんからもありましたように、僕もこの招致のプロモーション委員になっていろいろな人達にオリンピックについて話してみますと、厳しい意見を言われることもあります。

その中で僕がなるほどな、と思った意見をひとつ。

実は、同じ世代の経営者の人達と話していても、実は同じ札幌の人達でも、皆が皆、ウィンタースポーツを楽しんでいるわけではない、こういう場で言うのはちょっと差し支えるかもしれませんが、確かにスキーやスケートの競技される札幌市や北海道の人もいますけども、しない人たちはもちろんいるわけです。

札幌では、体育の授業でスキーをやりますけれども、皆が大人になってもやっているわけではないです。

また一方、スポンサーをしている企業の皆さんからしても、当然ジャンプやスキーなどいろいろ競技にスポンサーをしていても、競技者の人たちとは一緒に盛り上がるが、観客が多いとも言えないということに、少し疑問を感じているようなところもあるようです。

せっかくこれだけのウィンタースポーツの環境があるのに、スポンサーする側、競技者のためだけのスポーツになり過ぎていないか、

と感じている経営者もいるのだと思いました。

スポーツの本当の良さというのは、もちろんアスリートの素晴らしいレベルで身を費やしてきた方の本気の挑戦、こういう人がいて成り立つわけですが、同時に、本気でその人たちを応援することを通じて、僕たち普通の人たちもいろいろ学ぶと思います。

やはり、その競技者だけではなくて、周りで盛り上げる応援するというのを学ぶことも、ひとつのレガシーとして大切なのではないかと思います。

そして、ゆくゆくはオリンピック・パラリンピックのアスリートだけではなく、常に北海道・札幌はチャレンジする人たちをいつでも応援するというカルチャーが根付いていくことが、レガシーとしてとても大切なのではないかなと思っていますので、発言させていただきました。ありがとうございました。

岩田会長

ありがとうございます。永瀬委員どうぞ。

永瀬委員

永瀬です。おはようございます。素晴らしい発表ありがとうございました。私も共感する部分があると思いながら聞いていた素晴らしいプレゼンだったというふうに思います。

その中でも1つ良いなと思ったことが、やはり一過性のものではなくずっと続いているというところで、大会を開催しようとする、どうしても大会中をどうするか、というところに力や視点が注がれて、その時は何とかするけど、それが終わったら、結局もとに戻ってしまうということが社会では往々にしてあると思います。

そこだけではなくて、今からできるのではないかというものも有るでしょうし、そういったところをしっかりと作っていくことがレガシーになるのではないかと思います。

もっと細かく言えば、前回の会議で牧野さんが「フカフカ絨毯は車いすにとってバリアで大変なのです」というお話があったのですが、今日もまたフカフカなバリアな床になってしまったので、私とか狩野さんであればまだ良いのですが、牧野さんのような車いすの方には、玄関からここまで来るだけでも一苦勞ということが結局

また続いてしまう。ここで言ったので次の会議では変わるのではないかなと期待します。明日は会場のベニーツアーということで、朝メールをチェックしていたら「このタクシーに乗ってください」とちょっと載っていて、詳しくは読めてないですが、多分皆さんもバスで行かれると思いますが、車いすだけ一人にされることはどういう気持ちなのかなと。

会場へ行くだけだったら、私は北海道にいるので会場もほぼ見ているので、やはりイベントで皆で行くというところに意味があるのかなという中で、車いすだけ分けられるというのは、前回も共生という話をしていて、これは2030年になってやらなくても、今からでも何か取り組めることがあったのではないかと、朝ここにトコトコ歩いてくる中で、何かちょっと残念な気持ちで今日会議に来ました。

何が今日から明日からできるかを積み重ねていくということが、2030年のレガシーというものになっていきますし、今回レガシーという言葉がテーマですけど、なかなかレガシーといっても、ものすごく人によっていろいろな意見があったり、実際のレガシーもいろいろなことがあったり、ものすごく多いと思います。

学術的に説明しても、いろいろな説明があつて、それを市民、国民の人たちに社会に伝えようと思ったときに、レガシーという言葉だけでは、受け取り方はすごく様々になっており、そこをどう伝えていくかもこのプロモーション委員会や招致の動きの中では大事だと思います。

チカホを歩いている人をつかまえて一人一人5分10分説明していったところで、この札幌200万人全員には説明できないでしょうし、どうするかというと、やはり今日もたくさん来ていますが、メディアを通してどう伝えるかというところが一番大事になってくるのかなと思います。

メディアは、どう伝えるかという時に、私も普段新聞社で働いていますが、記事を読んでもらうために7文字10文字の見出しに気を引くような言葉がないと、なかなか本題を読んでもらえない。今ま

での招致の部分も、何なのかというところがなかなか伝わっていかない。先ほど牧野さんからもなかなか普段伝わってこない、という話しがありました。

東京 2020 大会のときは、復興五輪であったり、多様性と調和というようなキーワードであったり、いろいろあったと思いますが、今回の 2030 大会のキーワードというものがなかったので、お金のところしかメディアとしても注目しづらいのかなと思います。

テレビのコマーシャル 15 秒で伝えられるこれだというものとか、新聞の見出しでこれだというものが、常に目に飛び込んでくると、そこから関心を持って考えてもらえる、そういうようなところから伝えていけるテクニック、レガシーというものを考えたり、2030 までやっていけるのではないかな、というふうに思います。以上です。

岩田会長

はい、ありがとうございます。牧野委員。

牧野委員

すみません。今、永瀬さんのお話を聞いて一言。フカフカ絨毯のことですけれども、前回そのお話をしましたところ、帰りに市の職員の方がすぐ手伝って車いすを押して玄関まで送ってくださいました。必ずしも会場を変えなくても、それを気づいてくれて、それに対応してくれるその配慮、それが心のバリアフリーだと思います。関わることによって、子どもたちにもそうですけれども、まず知ってもらって気づいてもらう。これが一つ大事な事かなと思いついて、補足でお伝えいたしました。ありがとうございました。

今日も会場まで押していただいてサポートしていただきました。ありがとうございます。

岩田会長

ありがとうございます。その他ございませんか。

それではオンラインで参加をいただいております伊達委員お願いいたします。

伊達委員

(オンライン)

ありがとうございます。お二方のプレゼンテーションを非常に興味深く聞かせていただきました。

その中で蟹江研究室につきましては、私も SFC の方の出身だということもありまして、「未来からの留学生」という言葉が非常に懐か

しいなと思って聴いていました。おそらく大学ができた 1990 年の入学式の際に、当時の学部長が仰った言葉になるのですが、いまだに、そのキーワードをもとに研究が続けられているということを非常にうれしく思いました。

同時に、この言葉が今回のオリンピック招致、もしくは札幌でやる意義としても、重要なキーワードになるのではないかと感じました。

オリンピックは 8 年後でして、その 8 年後に何が起きる、もしくはその先のために何をするのか、という未来に向かった考え方、未来志向で考えていく必要があるということです。

前回、第 2 回（委員会）の時には、東京オリンピックでの課題を全て洗い出して、それらの負のイメージを払拭する必要があるといいました。それはマストなのですが、それをやって初めてゼロ地点に立っているととらえるべきではないかと思えます。

その上で、今回、わざわざ札幌にオリンピックを招致するのであれば、札幌の未来をどのように変えていくのか、8 年後がどうなっていくから更にその先 10 年、20 年、30 年がどうなるのか？と、目標設定をしバックキャストする必要があります。

特に SDGs に関しましては、研究室のお話しにあったように、この数年の中で盛り上がりを見せているテーマですが、一方で具体的に何をどのようにしたら良いのかと理解している団体は非常に少ないと思えます。戦略的に推進できている都市も少ないと思えます。

その中で、あえて札幌であれば、何までするのか、具体的に示していかなければ、共感を得るということはできないと思えます。

例えば、今、減プラスチック、つまり、プラスチックをできる限り減らしていこうという話しをしていますが、札幌であれば脱プラスチック、完全に使わないということであったり、もしくはエネルギー問題にしてもネット・ゼロの環境をつくり、必ずエコ電源を使います、ということを行わざるを得ないのかもしれない。

そのためには、必要な投資というものが有るということも理解し

た上で、全体にかかるコストのあり方というのが、従来のハードと
いうか施設、競技場であるとか、そういった施設そのものの見栄え
を中心にするのではなく、将来にわたりより快適な空間、社会と環
境とが共生する空間づくりに投じていくことも、示していく必要が
あると思います。

また、レガシーについてですが、どうしても何かレガシーという
言葉が共有の理解に、なっていないのではないかと考えています。

私のあってほしいレガシーというのは、ここで大会があり、その
大会のためにやったことが、全てにおいて将来も持続的に活用され
るようなハード、ソフトそれから、メンタル的なもの、習慣になっ
ていくものです。それは市民が共感するストーリーでもあります。

もうひとつ付け加えさせてください。若者世代のテーマがありま
した。学生さんの方で Z 世代というキーワードがありました。2030
年には、労働人口に占める Z 世代やミレニウム世代が半数を占める
というデータもあります。例えば Z 世代であれば、どのように考え
てオリンピックが運営されていくのか、というものも、私は興味深
く考えています。若者にもっと任せるのはどうでしょうか。例えば、
これまでのロゴに関してみんなで手を上げて提案しましょう、と参
加型イベントをすることも、皆さんの思い出になってよいですが、
もっと具体的な運営を若者に任せて、そこで経験させておくことが
将来に役立つという考え方、シフトチェンジというものも、新しい
取り組みとして提案されてはいかがかと思います。 以上です

岩田会長

ありがとうございます。それでは菅谷委員をお願いします。

菅谷委員

おはようございます、菅谷です。今日はありがとうございました。

(オンライン)

2020 東京オリンピック・パラリンピックの経験の振り返りと、慶應
大学の皆さんによるフィルターのない生の声の多くの研究をご紹介
いただき、本当に勉強になりました。

今回のテーマであるレガシーについてですが、やはりレガシーの
中心に位置づけられるものが、SDGs なのだと思います。

この委員会の重要な役割としては、オリンピック・パラリンピッ

クを招致するというプロモーションであるわけですが、2020 東京オリンピック・パラリンピックが終わってからも、例えば、現在開催中の世界陸上からも、大きな感動をいただいております。是非この札幌の地に、オリンピック・パラリンピック大会が来てほしいと強く思っています。

前回の東京 2020 大会の取り組みの中で、経団連と他の経済団体で構成された「オリンピック・パラリンピック等経済界協議会」というものがございました。その中で、オリンピックを招致・開催する機運を醸成するために、スポーツの普及や、障がい者スポーツ支援に加え、社会のバリアフリー化など、日本の技術力を発揮することにも取り組んでまいりました。

こうした取り組みを、あわててオリンピックのためにやるということではなく、日頃から日本は SDGs に対して真剣に取り組んでいるということを国内外に示していくことが、効果的なプロモーションになるのではないかと感じております。

先ほどからいろいろな実感をお持ちの方々のご体験をご紹介いただいておりますが、そうした課題の解決を着実に実現していくことで、「日本はきちんと取り組んでいるな」と、「日本の札幌はなかなかすごいぞ」と思っていたいくことにつながり、そうしたところから着実に進めていくことは、将来に向けても決して無駄ではないと思いますので、今後も取り組んでいければよい思っております。以上です。

岩田会長

はい、ありがとうございます。日比野委員お願いいたします。

日比野委員

日比野です。本日はいろいろありがとうございます。

(オンライン)

先ほどから皆様のお話を伺って、いろいろ感じるがありました。

中でも慶應大学の早川さんが、最後の方に「私たちがほしい世界とスポーツ」のところで、システムをデザインできてないというご意見があったと思います。本当にこれはそうだなと思ってうかがっていました。

いろいろな社会的な貢献などを考えていくときに、どうしても具体性に欠けてしまうこともあって、しかも一過性であるものも多い中で、将来的にサステナブルな社会を作っていくためには、きちんとしたシステムデザインがないと、確立できないなど改めて思っています。

先ほど伊達委員の方からも話がありましたが、例えば環境のところで再生可能なペットボトルではないと本大会では利用を認めません、というようなことも伝えてみるなど、ある程度、きちんとした姿勢を見せていくこともすごく重要であると思っています。そういったこともスポンサーに求めていきます、というような姿勢も、私たちは持っていて良いのではないか思ったことが1点目です。

それからもう1点目は、先程の話にもありまして、若者の力、人の力というお話で、2つお話をします。

まず1点目の若者の力というところでは、今日の慶應大学さんもそうですけれども、様々なアイデア、柔軟な姿勢、考え方を持っていてらっしゃいます。高校生の方もあるとのご意見もありましたが、例えば、大会に向けてのアイデア・コンペティションのようなものを開催してみるとか、実際に参加してみるような機会を作る。こういった時期ですので、オンライン参加で構わないと思います。例えば、ジェンダーの問題に関心がある研究室が、ジェンダーについてこういうことが体感できるとか、何かいろいろなテーマ性をいくつか持った中で、学生さん同士が話し合っているものを私たちがアイデアをたくさんもらって良いのではないかと思いました。

これが1点目の若い人たちの力、若い人たちを参画させていく仕組みを作る、ということでした。

それから、レガシーの研究で、いろいろと特にパラ関係の論文を読みますと、指摘されている中に、いろいろな人の変化があったことがポジティブに書かれています。

ボランティアさんが関わって、変わったということはずごく出ているのですが、一方で、障がいのあるボランティアさんたちは満足

度があまり高くないのではないかと指摘されている論文があります。

これは永瀬さんもお話されていましたが、ただそこにいるだけじゃなく、ただメンバーの顔を揃えるだけでなく、きちんとした意見を入れていく。コアなメンバーで障がいがあってどういうことがお困りますかとお話を聞くのではなく、そういう人たちが委員・メンバーになって話をできるような仕組みをきちんと作っていかねばならない。

例えば、女性の数が合いましたという数合わせではない。障がい者がこれだけ居ますという数合わせではない。そこに、きちんと意見が入っていけるような参画できるものを作っていないと、単なるきれい事のイベントに終わってしまう可能性がすごくあると思っています。そういったことが、バリアフリーという話にも繋がっていくのではないかと改めて思った次第です。

短いですが、思ったことをお伝えさせていただきます。ありがとうございました。

岩田会長

はい、ありがとうございます。それではマセソン委員お願いいたします。

マセソン委員
(オンライン)

はい、ありがとうございます。学生さんたちの発表も大変参考になりました。どうもありがとうございました。

私たちは、レガシーを残そうとする過程において、誰も取り残されないよう意識するというのが大事だと思います。ありのままの自分たちが認められて、ここにいる誰もが自分の可能性に挑戦できるような居心地の良い環境づくりをしていくこと、その歩みを止めないということが、レガシー作りとしてとても大切なことになっていくと思っています。

よく言われている障がいの社会モデル、(障がいというのは、車いすに乗っていると、目が見えないとか、個人の心身機能の障がいを指すのではなく、社会のシステムや環境によって作り出されているもの) という考え方です。

今ある社会は、どうしてもマジョリティに適合しやすいように作られているものだから、結果として社会的に排除されたり、適合できなかったりすることで弱い立場に追いやられてしまっている人たちがいる。

この大会招致を目指していく中で、それまで社会的に弱い立場に置かれていた人たちが、社会の中で力を獲得していくというようなことが実現していたら良いなと思っています。

そのためには、機会が平等に与えられて、結果もそこについてくようなことがなければいけないと思っています。先程の永瀬さんのお話で、同じような場が与えられても疎外感を感じることもあるというところは、見せかけだけのインクルージョンなので、気をつけていただきたいと思います。

同じ場所にただいるだけで満足するのではなくて、そこにいてきちんと全ての人々が参画している、居心地が良い安心できる場所があり、誰もが活躍できる土壌が整っているということを丁寧に目指していかなければいけないと思います。

先ほど、牧野委員から、フカフカ絨毯のところで手伝ってくれる人がいてそれが解消されたというお話もありました。例えば、個人的にはトイレに行くたびに誰かに押ししてもらって、トイレが終わるまで待つられるということはすごく嫌な思いをするものです。障がいがあるなしに関わらず、自分一人で思ったところに行動ができるような権利が担保されるべきだと思います。もちろん人の手を借りることが悪いと言っているわけではないのですが、自分の力で出来ることは一人でできるという環境を整えていくことの必要性を大事にする視点を忘れてはいけないと思います。

特に日本では、障がいのある人達に対するサービスが後付けであったり、障がいのある人が来た時だけ対応すれば良いという別対応がよく見られます。欧米では、区別が差別ということが言われていて、ある特定のグループに異なる対応をすること自体がおかしいという考え方があります。日本でもこの考え方が徐々に広まっていっ

たら良いなと思っています。

共生社会とかレガシーとか、簡単にうまく残していくもいけるものではないのかもしれませんが。異なるニーズがある多様な他者が住みやすい社会を作るためには、いろいろな人たちの自由を少しずつ担保しながら、自分も少しずつ我慢を分かち合わなければいけない場面も出てきます。特定のグループだけが我慢を強いられるべきではありません。レガシーを考えていくというところで、学生さんたちのお話の中にもありましたけれども、一度立ち止まって取り残されている人がいないかということを中心に考えながら、進んでいただきたいと思います。ありがとうございます。

岩田会長

ありがとうございます。

ここで、元東京2020組織委員会の中村様、先程基調発言をいただきました。オンラインの参加をされました、中村様ひと言ご挨拶をお願いしたいと思います。

中村英正 様
(オンライン)

ありがとうございます。中村でございます。遅くなって申し訳ありませんでした。

先ほどは録画でプレゼンテーションをさせていただきましたけれども、東京大会では、いろいろ良かったところもありましたし、変えて行かなくてはいけないこともありました。

2030年の札幌に向けては、良かったところはぜひ参考にさせていただけたらと思いますし、逆に良くするチャンスが2030にもあると思っていますので、いろいろ前向きな方もいますし、まだネガティブな方がいらっしゃるかもしれませんが、必ずそのネガティブな方も大会に向けた期待というところがあると思います。

コミュニケーションを取りながら、どうやって共通点を見出していくのか、価値観が多様化しているのは事実ですけれども、それが賛成、反対という2つだけに集約して、平行線でいくのであれば、この社会に未来はありませんけれども、価値観が多様化する中でどこかに共通点を見つけていくというプロセスを、ぜひこの招致の過程の中でも見出していけると、非常に良い大会になるというふうに

思っています。

よろしく申し上げます。

岩田会長

どうもありがとうございました。

それでは意見交換に戻ります。荻原委員お願いいたします。

荻原委員

はい、皆様こんにちは。委員の荻原健司です。

(オンライン)

私からは、長野オリンピックが残したレガシー、いわゆる残した
ものについて、皆様に長野市長の立場も含めて、参考までにこのレ
ガシーについてお伝えしたいと思います。

4つについてまとめてみました。まずひとつ、長野オリパラが遺
したものとして、ひとつ目は「施設」です。

市内には6つの大型オリンピック施設があります。1つは「ホワ
イトリング」。これはフィギュア・ショートトラックスピードスケー
ト会場として使われておりまして、現在は市民体育館として、そし
て国際大会、全国大会等の会場やバスケットボールのプロチームの
ホームアリーナとして利用されております。

2つ目「アクアウイング」。これは当時アイスホッケー会場でした
が、現在はプールとして市民の皆様にも一年中楽しんでいただいでお
ります。

3つ目「長野オリンピックスタジアム」。これは開閉会式が行われ
た場所ですが、現在は野球場として、野球関係者の皆様に使って
いただいでおります。また、他のイベントなどにも使っております。

そして、4つ目の施設「エムウェーブ」。これも大型コンベンショ
ン、あるいはコンサートなどでも使われておりますし、また、冬は
スピードスケートの聖地として活用されております。全国中学校ス
ピードスケートの大会は、かれこれ通年15年間、そしてこれからも
続ける予定でございまして、いわゆる氷の種目の甲子園を目指して
おります。

5つ目が「スパイラル」。これはソリの競技場になります。こちら
は冬の氷を張るのをやめてしまいましたけれども、今度の2030年札
幌が決まった際には、こちらを使っていただくというお約束になっ

ております。これはソリ選手の夏場の練習拠点として活用をしております。

最後「ビッグハット」という施設。これもアイスホッケーの会場として氷の種目として使わせていただきました。これも夏場はコンサートをはじめ様々なコンベンション、そして冬は氷を張ってアイスホッケーや全中スケート大会のフィギュア会場などとして使っております。

こういった施設は、まちとして財政的な側面からみれば、いろいろな修繕等でお金はかかりますが、例えば昨今のコロナの集団接種会場として、1回目、2回目、3回目のワクチン会場として、この大規模施設が有効に活用されております。そしてまた、このワクチン接種に携わるスタッフ、特に市の職員中心に若い頃にオリンピックをマネジメントした、開催した経験から、大勢の人の流れをうまく対応するような、そういった当時のオリンピック・パラリンピックの経験が、現在のこういうコロナの状況の中でも活かしているというのは、正に当時のオリパラが残したレガシーの一つではないかと思っています。

2つ目は「文化」です。市内では国際大会、全国大会など、先程の施設などを有効活用しながら招致をしておりますし、また、様々な国際大会の事前合宿などでも使われておりまして、市民のスポーツ文化度を非常に高めている側面もございます。

また、プロスポーツチームがホームアリーナとして活用していただいておりますし、また、長野オリンピックを記念して始まりました長野マラソン、フルマラソンの大会も、いよいよ25回を迎えます。

こういったスポーツ文化が着実に根付いておりまして、前日から入っていただくお客様も含めまして、滞在型のスポーツイベントは、市の経済効果としても大いに発揮をしていただいております。

そして、この「文化」の中で申し上げなければならないのは、長野オリンピックを契機に始まりました一校一国運動、これは非常に

貴重なレガシーとして、代々その後も揺るぎない IOC の教育的プログラムに活用されていて、非常にこれは我々の誇りだと思っております。

また、このオリンピックを通じてボランティア文化が非常に深まっていることもお伝えしておきたいと思っております。

3つ目は「知名度」です。やはりオリンピックの効果は絶大で、市内に訪れていただく海外旅行者の方々は、非常に多くなりました。もちろん、スキーを楽しむ方は、長野市以外の白馬村であるとか、志賀高原といった地域にスキーに出かけますが、やはりオリンピックのホームタウンである長野市にも 1 泊あるいは 2 日滞在しようという海外のお客様も大変増えております。

やはり、オリンピック効果、集客力という意味でも非常に絶大だと思っております、これも正に遺したレガシーでまちの大きな経済効果を生んでいると思っております。

最後 4 つ目ですが、やはりオリンピックが残したものは「市民の心」。いわゆるハートのところは非常に大きいと思っております。

2018 年に長野県の世論調査協会がオリンピックをやって良かったか悪かったか、そういう調査をしました。良かった、まあ良かったを合わせて 9 割、90 パーセントの方がやって良かったと言っております。

パラリンピックにつきましても、8 割の方々がやって良かった、非常にこれは高い数値ではないかなと思っております。

そういう方々が、このまちに暮らすという上で、誇りを持って暮らしていただいているというのは、非常に私も市長の立場として市政運営もやりやすい状況を作っていただいていると思っております。

実は先日、若い世代の方々から長野オリンピックの意味、意義、あるいはレガシーについて、取材を受けました。

彼ら彼女たちが言うのは、やはり若い世代は直接的にオリンピック・パラリンピックを経験していないので、その良さであるとか、

意義や意味について、非常に分かりづらいというお話しがありました。

東京 2020 大会は、日本で開催された大会であり、若い世代の方々もいろいろな意味で感化された方も多いと思います。

また、東京大会では新種目も生まれました。メダリストも生まれました。こういう若い方々が今、非常にオリンピック・パラリンピックに関心を寄せている中で、札幌大会の招致が実現され、そしてこの長野市においては、ソリ競技が行われることによって長野市の若い世代の方々、直接的にオリンピック・パラリンピックを知らない方々が、直接触れ合うという良い機会になるとと思いますので、私としても何とかこの招致実現に協力したいと思っております。

最後に、番外編として個人的なお話しとなってしまう恐縮ですが、私はかつてノルディック複合の選手でした。

今の IOC が、オリンピック種目から（ノルディック複合を）除外するか否かという議論がありまして、次の 2026 年大会は除外はされないということが決まったのですが、札幌の 2030 年大会は除外される可能性があるということに変わりはありません。

ただ、私としては、やはり札幌ではノルディック複合競技を実現していただきたいと思っています。

実は今、ノルディック複合の女子選手を、世界各国で育成強化に取り組んでいる中で、日本は非常に進んでおります。

今シーズンのナショナルチーム・ノルディック複合チーム女子選手 7 人のうち 5 人が北海道出身の選手です。彼女達やあるいはこれからの若い世代の北海道出身の選手が中心となって活躍してくれると思いますので、そういう選手たちが地元の大会でメダルを獲ってもらおうと。今ノルディック複合は、男女合わせて国際的に活躍しています。

2030 年大会でノルディック複合男女が実施されれば、メダルの可能性が極めて高い種目になってくると思いますので、こういったところも機運醸成の PR にぜひ使っていただきながら、そしてノルディ

ック複合競技もオリンピック種目として継続されるという環境も作
っていただきたいと思います。長くなりました、以上です。

岩田会長

ありがとうございます。

ここで遠藤特別顧問がオンラインに参加をされました。

一言ご挨拶をいただきたいと思います。よろしく願いいたしま
す。

遠藤特別顧問

どうも皆さんご苦勞様でございます。

(オンライン)

ちょっと(参加が)遅くなりまして失礼いたしました。

先ほど中村さんなどと一緒に、総理にいろいろなオリンピックの
話をしてきたのですが、2030年ぜひよろしくという話しをしました
時に、総理も「自分は外務大臣で、東京オリンピック・パラリンピ
ックの招致の時に最後まで楽しい思いをした、皆で喜んで、その後
皆さん大変ご苦勞された中で、素晴らしいオリンピック・パラリン
ピックにしてくれた、皆さんのご苦勞に感謝をします」と、そんな
話をしていただきました。

ぜひ決めていただいて、そして国としてもしっかりサポートする
体制を作っていきたいと思っております。

先ほど来、話しを少し聞かせていただきましたけど、ひとつ心配
なのは、全体としての盛り上がりはまだ欠けているのかなど、それ
が札幌市の支持率にもつながってくると思いますし、日本全体に
2030年の札幌(開催)というイメージがまだほとんどないのかなど
いう危惧をしております。

さきほど荻原さんから一校一団(運動)の仕組みを作ったと、そ
れを今度は、東京オリンピック・パラリンピックの時には、ホスト
タウンという仕組みを作って継承したわけですが、もう少し若い人
も含めて、その招致の思いを、この広がりをもっとどう作っていくかとい
う取組みが、なお一層必要なのかなど。高橋さんもいらっしゃいま
すが、ぜひ国会の中でももっと騒いでいただいて、そして、少しで
も多くの皆様方に意識をつなげていただきたい。

JOC 山下会長など皆さんの話を聞いておりますと、意外に早く動

きが進んでいるということも聞いておりますし、そういう意味でも、今のこの取組みは大変大事ですから、やはりオリンピック・パラリンピックというのは、やっている最中は本当に大変ですが、東京オリンピック・パラリンピックでも観客は残念ながらいませんでしたが、世界 30 億人から 40 億人の皆さんがテレビで観て、そしてやはり、こんな時にしっかり日本でできるんだよねとそういう評価をされてきましたし、その後の札幌、あるいは日本に対する思いが強くなっていきます。

そういう意味では、ぜひ力合わせて招致をして、素晴らしい大会にして行きたいと思っておりますので、我々もしっかりとお手伝いさせていただきますが、ぜひ岩田会長と皆さんでご努力をいただきたいと思えます。どうぞよろしく願いいたします。

岩田会長

どうもありがとうございました。

それでは、意見交換に戻ります。井本委員お願いいたします。

井本委員

皆様おはようございます。井本です。

(オンライン)

非常に素晴らしいプレゼンテーションありがとうございました。

本当に心に響きましたし、今回（基調講演の）ご提案させていただいて本当に良かったと思えました。

たくさんの委員の方がおっしゃっていることに、都度うなずいていましたけれども、一つ、慶應大学の学生さんのプレゼンテーションを聴きながらすごく響いたこと、そして思ったことというのは、課題の部分がとても浮き彫りになっていました。

例えば、都合の悪いことは無視するとか、差別をする、目に見えない差別があるとか、他人事のように皆が感じている、そういったことを、いつもは未来のためとか、レガシーとか、共生社会とか、いろいろ耳に聞こえのいい話がかなり前に出てきているんですけども、やはり響いてこないというのは、もう少し課題の部分に目を向けて、そういったことを前に出して、何がいけないのか、何を変えなければいけないのか、というところを明確にすることが必要なのではないかと、学生さんのプレゼンテーションを見ていて思いま

した。

私もかなり海外生活が長いのですが、すごく日本を見ていて感じるのは、他人ごとというか、無関心なことです。

こういったことに働きかけられるような政策、方針を作って、私たちが感じている心配ごとや課題をもっと前に出していくべきではないかというふうに感じました。

もうひとつ、やはり 2030 年に向けて大切なレガシーとして作っていかなければいけないのは、気候変動だと思います。

今後の委員会でもこれについて議論すると思いますが、先ほど佐々木先生のお話しにもあったように、パラダイムシフトが招致の時から実際の大会までにあったと。そういったことが、おそらく 2030 年までの間にも起こりうると思っています。

その中で、やはり気候変動というのは、かなりのキーになると思いますし、その先を読んでいくことというのはとても難しいんですけども、かなりの力を入れて、気候変動をレガシーとして一番前ぐらいに持っていかなければいけないと思っています。

最後、レガシーと少し違うのですが、さきほど太田委員も仰っていましたが、どのようにこの会議を進めていくかというところで、まだ、皆さん私も含めて言いつ放しで、それぞれが言いたいことを言う。その中身はとても大事なことを皆さんが仰っていて、それを事務局の方に持ち帰っていただいて、また更に練っていただく形だと思いますが、やはり、もう少し対話的で、双方向でキャッチボールできるような対話、そして意思決定みたいなものができればいいなというふうに感じております。以上です。

岩田会長

はい、ありがとうございます。大分時間が押しており恐縮でございますが、簡潔によろしく願いいたします。

高橋委員お願いいたします。

高橋委員

発言の機会ありがとうございます。

(オンライン)

中村さん、それから学生の皆様方のお話しを大変興味深くお伺いをいたしました。中村さんが戻ってこられましたので、そのご発言

に沿って1つ意見を申し上げます。

レガシーとして、ご経験を踏まえた上で、「簡素化・軽量化」「多様性」「参画」このことについてご説明をされたこと、大変我々も参考になったわけですが、ありのままの街、これを最大限活用するというご発言。そうだなあと。札幌というのは緑も豊か、自然も豊か。そのままの札幌を有効活用というのは、よくよく札幌市民としても分かるのでありますが、ただ私、前回も申しましたとおり、今回の北海道札幌大会は、オリンピックは1972年もやらせていただいたことからしますと、やはりパラリンピックの招致という方がより重要性があるのかな、というふうに個人的には思っております。

そうした場合に、またお客さまも世界からさまざまな方々がいらっしゃるとした場合に、この今の札幌のまち、いろいろな方々がユニバーサルに活動していただくためには、すべての方々にやさしいまちづくりという観点からは、やはりインフラ整備ということは視野に入れていかなければならない。

現実的には、こういったことはあると思うわけでありまして、そういったところをその開催都市のありのままということを最大限に活用しながら、どのように調整していくのか、調和をしていくのか、これは現実論として我々考えていかなければならないことかなと思うわけでありまして。

そして、そういうハード面の整備を補完するのが、まさに我々道民市民の意識、心であると。これは各委員からお話しもございました。私もそのように思うわけでありまして、皆で支えていくという意識を強く持っていかなければならない、このように思います。

それから先程、遠藤顧問の方からございました。私も国会議員の端くれでございますので、全国民の皆様方の注目を集め、関心を持っていただくためにも、国会の中でも盛り上げる活動をやっていかなければならないと思っておりますので、関係諸方面のご理解、ご協力よろしくお願いいたします。以上です。

岩田会長 はい、ありがとうございます。本橋委員お願いいたします。

本橋委員 はい、みなさんこんにちは。

(オンライン) 第3回目ということで、私1、2回目は時間の都合上、半分ぐらいしか出られなかったり、欠席になったりしてしまいましたが、今回は2時間しっかり出させていただいています。あ、こういう感じの会議なんだということもつかみまし、実際に、会議が本当に一方通行にならずに、議論に対して会話形式でできるように、立て直して行くことが一番なのかな、この会議の本来の形なのかなと感じました。

私自身もカーリングをやっていて、カーリングチームを持っています、2022北京五輪も、所属チームが日本代表として行かせていただき、オリンピックの良さは、本当に十分に分かっています。

一道民として、やはり盛り上がり方が足りていないということも、道民としてすごく感じています。

なぜなら、オリンピックで選手たちが、テレビの前や現場で人の心を動かすあれぐらいのエネルギーというのは、招致の段階では、生み出すことできないと感じています。あれは、計画的な感情ではないので。

ただ、招致は、計画的に人の心を動かしていかなければいけないという作業をどうするかという中で、何かオリンピックは敷居が高くなっている感じのところもあります。

私もオリンピック選手なので、そんなに敷居が高いとは感じてはいないのですが、周りの皆さんは、オリンピックにすごいプレミア感があって遠く感じると言ってください。

私自身が、「オリンピックを有効活用するという考えはどうですか？」と言うと、「ああ、オリンピックを使うという意味だと何かアイデアが出そうだね」というふうになる。難しい言葉ではなくて、道民や国民に対しては、情報開示というものが求められると思いますが、言葉の発信の仕方や、このオリンピックをやらせてもらうのではなくて、オリンピックを使って自分たちがより住みやすいまちに

したいとか、国にしたいという話し合いができれば良いのかなということは、道民としてすごく感じています。

皆さん、オリンピックが来たらいいね、という風に言ってくれるのですが、ただまだ自分ごとにはなっていないというのは、北海道に住んでいる私自身としてすごく感触的な感じはします。

以上になります。

岩田会長

ありがとうございます。三屋委員お願いいたします。

三屋委員

ありがとうございます。よろしくお願いいたします。

(オンライン)

両プレゼンターの方皆さん、本当にありがとうございました。非常に参考になりました。やはり中村さんのおっしゃっていたことがやっぱりいいなと。東京オリンピックをしっかりと考察していることは大事な作業だったと思いますし、それから慶應の学生さんたちも、さすがZ世代の考え方がものすごく面白いなと、我々みたいなXだとかYだという頭が固くなっている世代ではないというところが、本当に良いなと思いました。

簡単に1点だけ。東京にいますと、北海道・札幌オリンピックを招致しているという欠片も感じられないところがあり、やはりデジタルネイティブな世代の人達にどんどん発信してもらえば良いと思っています。

だから、その人たちの発信力はものすごく大きいなと思っていますので、若い方々に参画していただくということは大賛成です。

それから、もうひとつは、株主総会を経験されている方だったら分かると思うのですが、株主から文句言われていると思うと、ものすごく嫌なものですが、株主から説明の機会を与えてもらったと思うと、株主総会ではきちんと説明できるな、時間をもらえたなと思います。

ぜひ、オリンピックにネガティブな意見を言っている方々に説明の機会をもらったと言うことで、ちょっと面倒なことで耳障りなことになるかもしれませんが、タウンミーティングのような形でどんどんネガティブな発信をしている人たちに説明の機会を

いただく、そんな風に考えてみたらいかがでしょうか。以上です。

岩田会長

ありがとうございました。たくさん意見を頂戴いたしまして、本当にありがとうございます。

役員の皆さんからもご意見を簡単にいただきたいと思います。

まず、鈴木副会長の代理であります小玉様、お願いいたします。

小玉俊宏 様

発言の機会をありがとうございます。

(鈴木副会長代理)

知事も学生さんのお話を聞けることを本当に楽しみにしていましたが、本日欠席となり、大変申し訳ございません。

お話を聞いていて、若い人の新鮮な発想、それからバックキャストの考え方、これが非常に重要であり、さらに子供たち、学生の皆さんが議論に参加できるような工夫が必要と感じました。

北海道のこれまでの大会のレガシーを簡単に説明させていただきますと、やはり 1972 年の大会後、道産子のアスリート、パラリンピアンとオリンピックが大変沢山輩出されました。

そういった流れは、これからも 2030 年に向けては、その競技力の向上、それを支える環境づくりということは、一つの重要な戦略になると思います。

また、1972 年には街のハード面での整備がめざましく進んだわけですが、テーマソングとなった「虹と雪のバラード」に象徴されるほか、芸術文化面でも北海道に誇りや希望を認識する数々の作品や活動が生まれたというふうに受け止めております。

2020 年の東京大会では、コロナ禍で多くのホストタウンが受け入れの中止を余儀なくされましたが、道内でも 7 市、2 町が受け入れを行うことができました。

北京大会に際しましても海外との往来の制約がなければ、その準備や合宿に、北海道は大きな役割を果たせたのだらうな、というふうに皆思っていると思います。

それから、東京 2020 大会の開会式でお披露目された木製のオリンピックリングスっていうものがありました。これは 1964 年の大会で世界各国から持ち寄られました木の種を遠軽町で育てて、それを

使って造形されたものでございます。

こういう形で有形なものではございますが、その背後では日本中でたくさんの物語が紡がれたということも、大きなレガシーになるのではないかな、というふうに思います。

2030年大会に向けては、ホストタウンの取組に加えまして、各学校の創意工夫による各国々との交流を喚起できればなというふうに思っております。

学校は、オンライン環境が整いましたので、メタバースなどのICT技術の進化によって、新たな対話や迫力ある観戦、応援のスタイルが生まれ、子どもたちに交流と挑戦することの価値を知ってもらいたいなというふうに思っております。

2030年はSDGsのゴール年でもあります。同時に新たな扉が開かれる節目の年と受け止めております。環境問題や共生社会の実現など、世界共通の課題解決に向けた多様なムーブメントが、ここ北海道で縦横につながり、それを発信することによって、新たな持続可能な価値を創造する潮流を後押しできるのではないかなというふうに期待しております。以上でございます。

岩田会長

ありがとうございました。森副会長お願いいたします。

森副会長

非常に時間が押しておりますので、短くいたします。

まず、今日のプレゼンは、大変有意義なプレゼンでございました。

前回、私が申し上げたのは、我々プロモーション委員会としては試合と勝負と両方を勝たなければいけない、ということをお知らせしました。

この試合というのは、正にこのプロモーション委員会の先に2030年の札幌が実現するというそのプロセスであります。そこについては、他の方の意見もございましたけれども現実にこのプロセスに対して、ネガティブな意見をお持ちの方に対してしっかりと説明していく、その中で、中村さんのご説明の中にその数字だけにあまり怯える事ではなくて、具体的にその裏にあるなぜ反対するのか、そこをしっかりとつぶしていくことが大変具体的に大事で、中村さんの

説明は大変参考になりました。

そして、勝負に勝っていくというところは、今日、多くの方々がご発言されているスポーツを通して目指す社会を作っていく、そこについては、今日やったから、今日結論が出るものではないので、これは、じたばたせずに継続してやるべきことをやっていると、そういう意味では、今日は大変実りのある議論が展開されたのではないかと思います。以上でございます。

岩田会長

ありがとうございます。

それでは、秋元会長代行お願いいたします。

秋元会長代行

ありがとうございます。プレゼンテーションをいただきました中村さん、それから慶應大学の皆さん、本当にありがとうございます。素晴らしい発言をいただいてありがとうございます。

中村さんからは、東京大会からの様々な提案、提言ということをしていただきまして、大変参考になり、今後の活動にしっかりと取り組んでいきたいというふうに思っております。

また、慶應大学の皆さんの発表ですが、各委員の皆さんもおっしゃっていますけど、やはり若い世代の方々に参画をしていただく、自分ごととして参画をしていただくということ、とりわけ SDGs ですか環境の問題には、若い方は非常に関心高いわけです。

ですから、そういった事柄に対して、具体的に若い人たちがこのプロジェクトとして参画できるような仕組み、こういったようなことにも取り組んでいきたいなど、こんなふうに感じたところであります。時間の関係がありますので、簡単にお話しをさせていただきました。ありがとうございます。

岩田会長

ありがとうございました。

2020 大会からのレガシーをどのように 2030 大会に引き継いでいくか、そして 2030 大会のどういうレガシーを残していくかということ、を早い段階から目標として明らかにして、そして道民、国民の皆さんに理解をしていただくということが、招致にとっても大変重要な意義があるということを改めて再認識をいたしましたので、本日

みなさまからいただきました意見を整理いたしまして、中間取りまとめ案、あるいは大会概要案に反映をさせていきたいというふうに思います。

3. 次第3：機運醸成について

岩田会長

次の議題、次第3の「機運醸成について」移らせていただきます。

前回の会議で、国内世論の支持を高める必要があるとご指摘をいただきましたように、この夏から秋にかけての機運醸成が、招致実現に向けて極めて重要というふうに考えてございます。まずは、事務局説明に先立ち、私が会長を務める「冬季オリンピック・パラリンピック招致期成会」についてお話しをさせていただきます。

機運醸成は、まずは地元の支持を高めることが重要であるため、札幌商工会議所を事務局に関係団体で構成される招致期成会が中心となり、7月から9月を集中取組期間として、多くの関係者とともに応援の声をあげ、招致を盛り上げていきたいと考えております。

その取組のキックオフと致しまして、明日7月27日に招致期成会総会を札幌市内で開催いたします。この場を機運醸成の「総決起集会」と位置付け、委員の皆様にもご案内させていただいたところでございます。ぜひご来場いただきまして、関係者が一致団結して招致を更に盛り上げるスタートとしたいと存じます。ご協力をよろしくお願い申し上げます。

それでは、改めまして、事務局より、札幌・北海道における取組を中心に、機運醸成の詳細について、ご報告をさせていただきます。

事務局

はい、それでは事務局よりご説明いたします。右下に番号13と

(梅田スポーツ局長) 書かれたスライドをご覧ください。

まず、機運醸成の考え方についてご説明いたします。本年3月の意向調査結果を踏まえた現状認識と課題感として、「約6割に上る中間層の取込み」、「大会招致を知らない1割から2割の層への対応」、「比較的支持の低い中高年を中心とした層の理解促進」の3点が挙げられます。これらを踏まえて、まず、ターゲットと取組の進め方

として、中間層を中心に取組を進めます。また、関係団体との連携推進とイベント活用等によるポジティブな空気感の演出を進めるため、様々な取組を進めます。

並行して、不安や懸念の払拭・住民理解促進の取組として、中高年層を中心にアプローチし、企業向け出前講座の拡大を図ります。

ここからは、機運醸成活動について、札幌・北海道の取組を中心にご紹介いたします。先ほど岩田会長よりお話しがありましたとおり、冬季オリンピック・パラリンピック招致期成会が中心となって取組が進められており、この7月から9月を集中取組期間として、招致応援プログラムの積極的な活用、イベント、招致応援メッセージによる発信などを行います。また、明日27日には、招致期成会の総会が予定されております。

次に、今後の主要イベントとの連携予定として、ご覧のとおり、サマージャンプ大会や北海道マラソンなどの大規模な集客イベントの機会を積極的に活用し、市民・関係者が一丸となって、機運醸成の取組を進めてまいります。

次に、イベント等の機会を活用した取組をご紹介します。

まずは、北海道の取組として、今月17日に開催しました「北海道スポーツの未来を拓く集い」です。イベントには、東京2020及び北京2022大会で活躍した道内ゆかりの選手たちが登壇し、トークショーなどが行われました。この「北海道スポーツの未来を拓く集い」のダイジェスト動画をご用意いたしましたので、ご紹介いたします。

つづきまして、スライド17です。市内の商業施設や大倉山オリンピックミュージアムでのパネル展や競技体験等の機運醸成イベントの様子を紹介しています。

続いて、都市装飾についてです。地下歩行空間の柱巻きを、直近の北京2022大会で活躍したアスリートの写真を活用したデザインへとリニューアルいたしました。また、市役所・区役所や道庁赤レンガ庁舎改修工事の仮囲い、スポーツ施設、地下鉄などの公共施設

の装飾についても、順次更新・展開を行なっているところがございます。

次に、住民理解促進の取組についてでございます。広報さっぽろの特集記事や出前講座、生活情報誌と連携した連載企画などに取り組んだところです。今後も、不安や懸念を払拭するための取組を進めながら、多くの市民・道民の皆さまから歓迎される大会を目指してまいりたいと思います。

次に、全国における機運醸成活動についてご紹介いたします。JOCを中心に、オリンピックコンサートやシンボルアスリート・ネクストシンボルアスリート認定式、今年 23 日に行われた東京 2020 大会一周年記念セレモニー等の機会を活用した取組を行いました。

また、招致 WEB サイトにおいても、ツイッター公式アカウントを開設し、一層の情報発信を図っているところがございます。

次に、招致応援プログラム向け広報 PR ツールのご紹介になります。現時点で、ご覧の PR グッズを作成しております。本日、会場参加の皆さまの席上に、ピンバッジを配布させていただきました。オンライン参加の皆さまにも、後日郵送させていただきますので、ぜひご活用をお願いいたします。その他のグッズにつきましても、それぞれ一定数を順次郵送させていただいておりますので、委員の皆さまに置かれましては、広くご活用いただきますようお願い申し上げます。

最後に、「北海道・札幌 2030 オリンピック・パラリンピック招致応援大使」について、ご説明をいたします。招致応援大使は、情報発信の強化と一層の機運醸成を目的として、本日時点で、プロモーション委員の冬季どさんこアスリート委員であります永瀬委員・原田委員に加えて、写真が間に合っていませんでしたけれども、狩野委員に大使にご就任いただきました。大使の皆様には今後、様々な場面で機運醸成活動を一緒に取り組みでいきたいと考えております。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

なお、事務局からひとつ報告でございます。

本日欠席の渡邊委員からメールが届いております。その中の意見をご紹介します。

ひとつは、大通公園で開会式、あるいは一部の競技開催を検討してはどうか、ということと、札幌をアジア・オセアニア地域での最高峰の冬季リゾートにしていき、世界中から多くの観光客を誘い込むということをアピールしてはどうか、というご意見をいただいております。

事務局からの説明は、以上でございます。

岩田会長

ありがとうございました。なお、ただ今の説明のとおり、永瀬委員、原田委員そして狩野委員には、招致応援大使に就任をいただきました。お三人のますますのご活躍をご期待を申し上げたいと思います。プロモーション委員会としても積極的にバックアップをさせていただきます。

それでは、3人を代表いたしまして、原田委員より抱負を一つお願いいたします。

原田委員

招致応援大使となりました原田と申します。盛り上げるんだったら原田だろうというふうにご指名を受けましたので、頑張ってみりたいと思っております。

委員会の皆様のたくさんの意見交換によって、非常に準備が着々と整っていると感じております。

あとは、我々の覚悟を伝えていくことが必要なのではないかと思います。大会決定まであともう少しとなってきました。

絶対に札幌でオリンピック・パラリンピックを行うんだという強い気持ちが人々の心を動かすんだというふうに思っております。

原田、永瀬、狩野というふうになりましたけれども、委員の皆様全員の思いを乗せて、招致応援全力で頑張ってみます。

どうぞよろしくお願いいたします。

岩田会長

ありがとうございました。それでは機運醸成について何かご意見、ご質問がございましたら、お願いをいたしたいと思っております。

永瀬委員

いろいろなアイデアをありがとうございます。

イベントなどは、準備などいろいろ時間がかかかるとは思います、SNS をもっと効率的に活用していくと良いのではないかなと思います。

ツイッターのアカウントが、今月頭にできて、まだ3個しか投稿がなくて、フォロワーも340人。やはり、SNSは日々上げるぐらいの感覚で、どんどん上げていく方が良いのではないかなと思います。

私もSNSを普段使っていますけど、なかなか役所の方はSNSを使ってなくて、何を上げたら良いのだろうかと悩むのであれば、私も一緒になって考えますし、それこそ先ほどZ世代とありましたが、若い学生たちの声を聴いて、SNS世代にどうやって効果的に「いいね」が増えるのかを聴いていくと、行政の広報とはまたちょっと違うと思います。

今はTwitterですが、Facebook、Instagramも活用して、それぞれ使っている年代、見る年代が違うので、そこへのアプローチの仕方も違ってきます。

秋元市長も、Facebookをやられています、Twitterはやっていないので、多分つながっていないと思います。だからFacebookをやって、秋元市長がシェアしてくれれば、さっき見たら3,800人ぐらいの「友達」がいるので、そこにもつながるとか思います。

オリンピック・パラリンピアンは、結構SNSいろいろやっている、ので、どんどんつながって、そういった輪を広げていくというところが重要ですし、YouTubeはちょっと手間かかりますけど、うまくYouTubeも活用して発信をしていくことが大事かなと思います。

あと、ピンバッジは、1つしかもらえないんですか？

私がPRで応援大使として配ろうと思っても、これを配っちゃったら1人に配ってなくなっちゃうので、数十個、数百個単位で配れるものを我々でいただければ、そこからどんどん広まるかなと思います。ありがとうございます。

岩田会長

はい、ありがとうございます。

その他何かご意見、ご質問ございませんか。

マセソン委員どうぞ

マセソン委員 (オンライン) ありがとうございます。短く。プロモーション委員会の今、お三方の名前を拝見して大変楽しみだなどと思っておりますが、残念ながら、一人も女性が入っていないので、ぜひ女性のアスリートも追加して一緒に活動していただければと思います。以上です

岩田会長 ありがとうございます。事務局、どうぞ

事務局 ありがとうございます。

(梅田スポーツ局長) 永瀬委員からご指摘のありました SNS の活用については、これからどんどん広がっていくような仕掛けを考えてみたいと思います。

それから、啓発品のピンバッジを今日はサンプルということで置かせていただきました。それぞれのプロモーション委員の方で広めていただくための PR グッズでございますので、必要数をおっしゃっていただければご用意いたしますので、よろしく願いいたします。

それから、招致応援大使は、今回 3 名を任命させていただきました。とりあえず第 1 弾ということで、できれば女性アスリートも、これから追加で任命させていただきたい、というふうに考えているところでございます。

事務局から以上でございます。

岩田会長 はい、ありがとうございました。それでは全体を通して何か皆様の方からございますでしょうか。

特にないようでございますので、以上をもちまして本日の議事を終了させていただきます。

時間超過をいたしまして、大変申し訳なく思っております。皆様のご協力に改めて感謝を申し上げます。ありがとうございました。

4. 次第 4 : 次回会議について (事務局報告)

事務局 それでは、次回の会議について事務局からご説明をいたします。

(梅田スポーツ局長) 次回の会議でございますが、9 月 8 日木曜日、午前 9 時から札幌市内の会場とオンラインのハイブリッドで開催をいたします。

次回につきましては「SDGs・経済まちづくり」をテーマに大会の

開催に関する議論を深めて参りますが、詳細につきましては、別途ご連絡をさせていただきます。以上でございます。

それでは、これで第3回北海道札幌2030オリンピック・パラリンピックプロモーション委員会を終了いたします。

長時間の会議、ありがとうございました。

この後は、囲み取材を行います。準備ができましたらご案内させていただきますので、関係の方はよろしくお願いいたします。

第3回 北海道・札幌 2030 オリンピック・パラリンピックプロモーション委員会
出席者一覧

(五十音順・敬称略)

役 職	氏 名	所 属 等
特別顧問	遠藤 利明	スポーツ議員連盟 会長代行
顧 問	室伏 広治	スポーツ庁 長官
会 長	岩田 圭剛	北海道商工会議所連合会 会頭 札幌商工会議所 会頭 冬季オリンピック・パラリンピック札幌招致 期成会 会長
会長代行	秋元 克広	札幌市長
副 会 長	小玉 俊宏	北海道副知事（鈴木副会長 代理）
	森 和之	公益財団法人日本パラスポーツ協会 会長 日本パラリンピック委員会 会長”
委 員	秋辺 日出男	アイヌ文化演出家
	芦立 訓	独立行政法人 日本スポーツ振興センター 理事長
	荒井 ゆたか	スポーツ議員連盟 2030年オリンピック・パラリンピック 冬季競技大会招致議員連盟
	伊藤 雅俊	公益財団法人 日本スポーツ協会 会長
	井本 直歩子	一般社団法人 SDGs in Sports 代表
	太田 雄貴	国際オリンピック委員会 委員
	荻原 健司	長野市長
	片岡 辰三	ニセコ町教育委員会教育長 (片山健也ニセコ町長 代理)
	狩野 亮	パラリンピアン（スキー・アルペン）
	河合 純一	日本パラリンピック委員会 委員長

木村 麻子	日本商工会議所 青年部 (株式会社P R 代表取締役)
菅谷 とも子	A N A あきんど株式会社 代表取締役社長 (日本経済団体連合会推薦)
高橋 はるみ	スポーツ議員連盟 2030年オリンピック・パラリンピック 冬季競技大会招致議員連盟
伊達 美和子	公益社団法人 経済同友会 副代表幹事 (森トラスト株式会社代表取締役社長)
永瀬 充	パラリンピアン (アイスホッケー)
原田 雅彦	オリンピック (スキー・ジャンプ) 公益財団法人 日本オリンピック委員会 理事
日比野 暢子	桐蔭横浜大学 教授
牧野 准子	ユニバーサルデザイン 有限会社 環工房 代表取締役
マセソン 美季	国際パラリンピック委員会 理事
三屋 裕子	公益財団法人 日本オリンピック委員会 副会長
本橋 麻里	オリンピック (カーリング)
文字 一志	倶知安町長
米沢 則寿	帯広市長